

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第260集

西都市所在

く し き
串木遺跡
第3地点

県道杉安高鍋線山城工区歩道整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

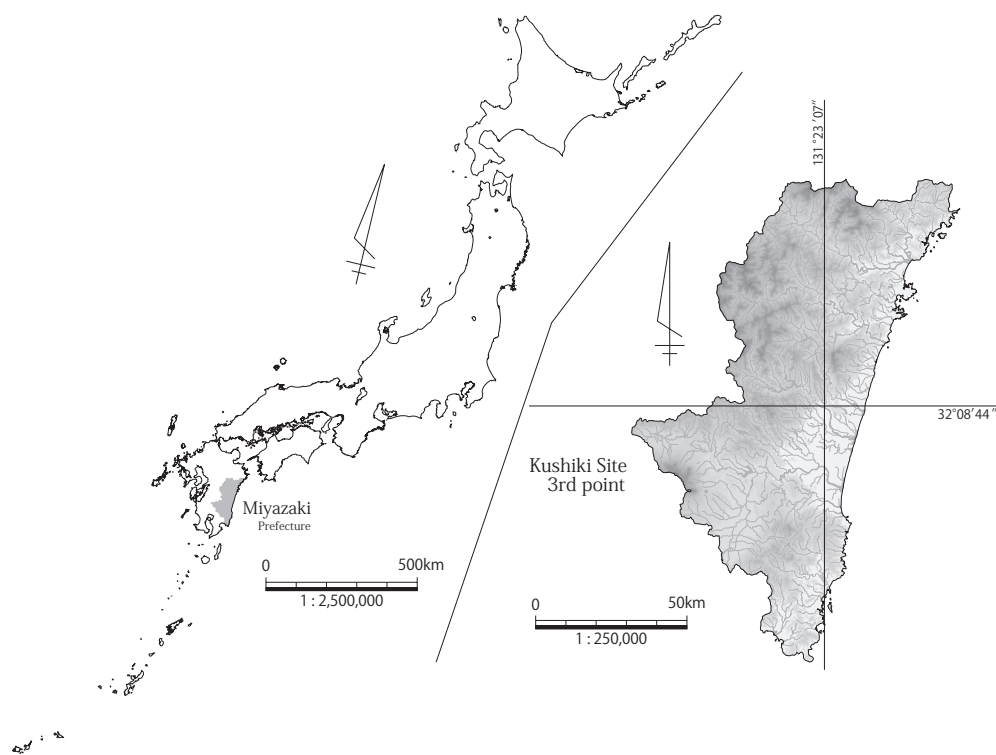
宮崎県埋蔵文化財センター

西都市所在

くしき
串木遺跡
第3地点

Kushiki Site
3rd point

県道杉安高鍋線山城工区歩道整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2022

序

それぞれの地域に根ざした歴史的遺産である埋蔵文化財は、我が国の歴史と文化の正しい理解の基礎をなすものです。一方、開発によって失われる側面もあるため、宮崎県教育委員会では、地域開発と調和を図りながら、埋蔵文化財の保存・活用に鋭意取り組んでいます。

宮崎県埋蔵文化財センターでは、県道杉安高鍋線山城工区歩道整備工事に伴い、令和2年度に西都市穂北に所在する串木遺跡第3地点の発掘調査を実施しました。本書は、その結果をまとめたものです。

串木遺跡第3地点では、古代の土壙墓をはじめ、古墳時代の竪穴建物跡、縄文時代後期から晩期の土坑等の遺構、また、縄文時代後期から中世までの遺物が確認されました。これらにより、西都市北西部における縄文時代から中世にかけての人々の営みの一端を垣間見ることができました。

本書で報告するこれらの成果や出土遺物等が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

令和4年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 菊村 祐司

例 言

- 1 本書は、県道杉安高鍋線山城工区歩道整備工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県西都市穂北に所在する串木遺跡第3地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は西都土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。調査は令和2年9月25日から令和2年12月15日までの51日間にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、大竹進太郎、江藤建輔、平井祥蔵、加藤真理子が担当した。現地調査における図面作成及び写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係る業務については、整理作業員の補助を得て行った。
- 5 空中写真撮影、自然科学分析（放射性炭素年代測定）は、次の業者に委託した。
 - ・ 空中写真撮影 有限会社 スカイサーベイ九州
 - ・ 自然科学分析 株式会社 古環境研究センター
- 6 本書で使用した第1図「串木遺跡第3地点と周辺遺跡の位置図（S=1：25,000）」は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1をもとに作成した。
- 7 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』を参考にした。
- 8 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海拔絶対高である。また、全体図で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。
- 9 本書の執筆は、大竹が行った。なお、第Ⅳ章の報告記載内容は、古環境研究センターへの委託成果品を大竹が整理・編集したものである。
- 10 土器の分類は橋本英俊、東憲章、和田理啓、谷口武範、須恵器及び磁器の分類は堀田孝博、石器の分類は日高広人、今塩屋毅行、藤木聡、石器石材の同定については赤崎広志による助言を得て、大竹が行った。
- 11 出土遺物写真撮影は、東が行い、大竹が補助した。
- 12 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

SD：土墳墓 SA：竪穴建物 SC：土坑 SE：溝状遺構 SI：配石遺構

本文目次

第I章 はじめに

- 第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第2節 調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第3節 発掘調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第II章 遺跡の立地と環境

- 第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第III章 調査の成果

- 第1節 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 第2節 遺構及び出土遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 第3節 古代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 第4節 古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 第5節 縄文時代後期から晩期の遺構と遺物・・・・・・・・・・ 13
- 第6節 時期不明の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 第7節 包含層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

第IV章 自然科学分析

- 第1節 自然科学分析の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
- 第2節 放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

第V章 総括

- 第1節 遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
- 第2節 出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
- 第3節 自然科学分析について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
- 第4節 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

挿 図 目 次

第1図	串木遺跡第3地点周辺の主要な遺跡分布図	4	第19図	SC7実測図	19
第2図	串木遺跡第3地点周辺地形	5	第20図	SE1実測図	19
第3図	串木遺跡第3地点遺構全図	5	第21図	SI1実測図	20
第4図	調査区土層断面図	6	第22図	小穴群平面実測図及び出土遺物	20
第5図	SD1実測図	8	第23図	時期不明の遺構に伴う遺物	21
第6図	SD1出土遺物①	8	第24図	包含層出土遺物①	26
第7図	SD1出土遺物②	9	第25図	包含層出土遺物②	27
第8図	SA1実測図	11	第26図	包含層出土遺物③	28
第9図	SC3実測図	11	第27図	包含層出土遺物④	29
第10図	SC4実測図	11	第28図	包含層出土遺物⑤	31
第11図	古墳時代の遺物	12	第29図	包含層出土遺物⑥	32
第12図	SC5実測図	14	第30図	包含層出土遺物⑦	33
第13図	SC5出土遺物①	14	第31図	包含層出土遺物⑧	34
第14図	SC5出土遺物②	15	第32図	包含層出土遺物⑨	35
第15図	SC5出土遺物③	16	第33図	包含層出土遺物⑩	36
第16図	SC1実測図	17	第34図	石錘度数分布表	41
第17図	SC2実測図	17	第35図	暦年較正結果	44
第18図	SC6実測図	17	第36図	暦年較正年代マルチプロット図	44

表 目 次

第1表	土器観察表①～③	37	第5表	石錘一覧表	41
第2表	陶磁器観察表	39	第6表	測定試料の詳細と方法	43
第3表	石器計測表	40	第7表	放射性炭素年代測定結果	43
第4表	鉄器計測表	40			

図 版 目 次

図版1	調査区全景（東から）／調査区全景（西から）	図版6	包含層出土遺物（1） 国産陶器・輸入磁器類／須恵器／ 中世土師器・布痕土器・古代土師器／古墳時代の土師器
図版2	SD1遺物検出状況／SA1遺物検出状況	図版7	包含層出土遺物（2）縄文土器 突帯文系／無文系／貝殻文系／磨研土器系／ 擬縄文系・沈線文系／底部・土製品
図版3	SC3完掘状況／SC4完掘状況／SC5完掘状況／ SC2完掘状況／SI1検出状況／SE1完掘状況	図版8	包含層出土遺物（3）石器 打製石斧／二次加工剥片／石錘／礫器・石包丁／ 石皿・砥石／敲石・磨石
図版4	SD1出土遺物／古墳時代の遺構に伴う遺物／ SC5出土遺物 石器		
図版5	SC5出土遺物 土器／時期不明の遺構に伴う遺物		

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

西都土木事務所による県道杉安高鍋線山城工区道路改良及び歩道整備事業の対象地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地（山城城跡・串木遺跡）が存在しているため、県文化財課は令和 2 年 4 月 23 日及び 7 月 2 日に確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の存在が確認され、工事の影響を受ける範囲について発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

西都土木事務所から県埋蔵文化財センターへ同年 8 月 3 日付けで調査依頼があり、埋蔵文化財センターでは、串木遺跡第 3 地点発掘調査を令和 2 年 9 月 25 日から令和 2 年 12 月 15 日まで実施した。また、同年 12 月から令和 3 年 12 月にかけて遺物整理と報告書作成を行った。

昭和 62 年、平成元年に実施された西都市教育委員会の調査では、串木第 1 遺跡、第 2 遺跡とされているが、同じ「串木遺跡」内の調査であることから、それぞれを第 1 地点、第 2 地点と読み替え、今回の調査範囲は「串木遺跡第 3 地点」と表記した。

第 2 節 調査の組織

串木遺跡第 3 地点の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、下記の組織で実施した。

【調査主体】宮崎県教育委員会

【事業調整】宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー	主幹	飯田 博之	(令和 2 年度)
	主幹	松林 豊樹	(令和 3 年度)
埋蔵文化財担当	主査	藤木 聡	(令和 2 年度)
	主査	沖野 誠	(令和 3 年度)

【調査機関】宮崎県埋蔵文化財センター

令和 2 年度 発掘調査、令和 3 年度 整理作業・報告書作成

所長		山元 高光	(令和 2 年度)
		菊村 祐司	(令和 3 年度)
副所長		赤崎 広志	(令和 2 年度は調査課長を兼務)
総務課長		鈴木 勝代	(令和 2・3 年度)
調査課長		飯田 博之	(令和 3 年度)
調査課調査第二担当リーダー	主幹	東 憲章	(令和 2・3 年度)
調査課調査第一担当	主査	大竹 進太郎	(調査、整理作業・報告書担当)
	主査	江藤 建輔	(調査担当)
	主査	平井 祥蔵	(調査担当)
調査第二担当	主任主事	加藤 真理子	(調査担当)

第3節 発掘調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

遺構の作図記録に関しては、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本とし、平面図については(株)CUBIC製の「遺構くん」で実測、作図・記録したが、土壌墓、土坑、配石遺構等、遺物出土状況を詳しく記録したものについては調査員が実測、作図を行った。また、写真記録に関しては、フルサイズのデジタルカメラを使用した。さらに、業者委託による空中写真撮影を調査区のⅢ層上面(完掘状況)・周辺地形等について2回実施した。

2 発掘調査の経過

串木遺跡第3地点の発掘調査は、210㎡を対象に、令和2年9月25日から令和2年12月15日まで実施した。調査は西北から東南に向かう狭長な範囲であった。調査地南は県道杉安高鍋線に隣接しており、道路側へのフェンス及び仮設ガードレールの設置、排土処理の方法等、安全面での配慮が必要であった。排土置場の確保等の面から、調査区東側と西側を、調査前半(令和2年9月25日から令和2年10月29日)と後半(令和2年11月2日から令和2年12月15日)に分けて調査した。便宜上、東側をA区、西側をB区と設定した。発掘調査経過の概要については、下記の通りである。

R2.9.25～9.30	重機によるB区表土除去、安全対策用フェンス及び仮設ガードレール設置
10.1	発掘作業員雇用開始、環境整備
10.5～10.7	B区精査、台風対策
10.12～10.17	B区Ⅱ層掘削、SE1検出
10.19～10.23	B区Ⅱ層掘削、SE1完掘、SC1検出、完掘
10.26～10.29	B区Ⅱ層掘削、SC2・3・4検出、空中写真撮影(1回目)
11.2～11.6	B区小穴群平面図作成、B区下層確認、SC2・3・4完掘 重機によるA区表土除去、安全対策用フェンス及び仮設ガードレール設置
11.9～11.13	A区精査、A区Ⅱ層掘削、SD1・SI1検出
11.16～11.20	SA1・SC5・6・7検出
11.24～11.27	SD1・SA1・SC5・6完掘
11.30～12.4	A区小穴群平面図作成
12.7～12.11	SI1、SC7完掘、空中写真撮影(2回目)
12.14～12.15	発掘作業員雇用終了、調査区埋め戻し、調査終了

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

串木遺跡第3地点は、宮崎県西都市穂北に所在し、一ツ瀬川中流左岸段丘上の標高約36mに位置している。周囲には、一ツ瀬川支流の瀬江川や西都市西方の九州山地を水源とする畑や水田が広がっている。

市道串木線の拡幅および排水路整備工事に伴い、西都市教育委員会が昭和62年に串木第1遺跡（第1図4）、平成元年に第2遺跡（第1図5）の発掘調査を行っている。遺跡の範囲は県道杉安高鍋線を挟んで約220,000㎡に及び、縄文時代早期から近世に至る幅広い時期の遺構・遺物が確認されている。本遺跡の北西に串木遺跡第4地点（第1図2）が隣接し、約500m北西に山城城跡（第1図3）が位置している。

第2節 歴史的環境

本遺跡が所在する一ツ瀬川の周辺には、縄文時代早期から中世にかけての遺跡が数多く確認されている。

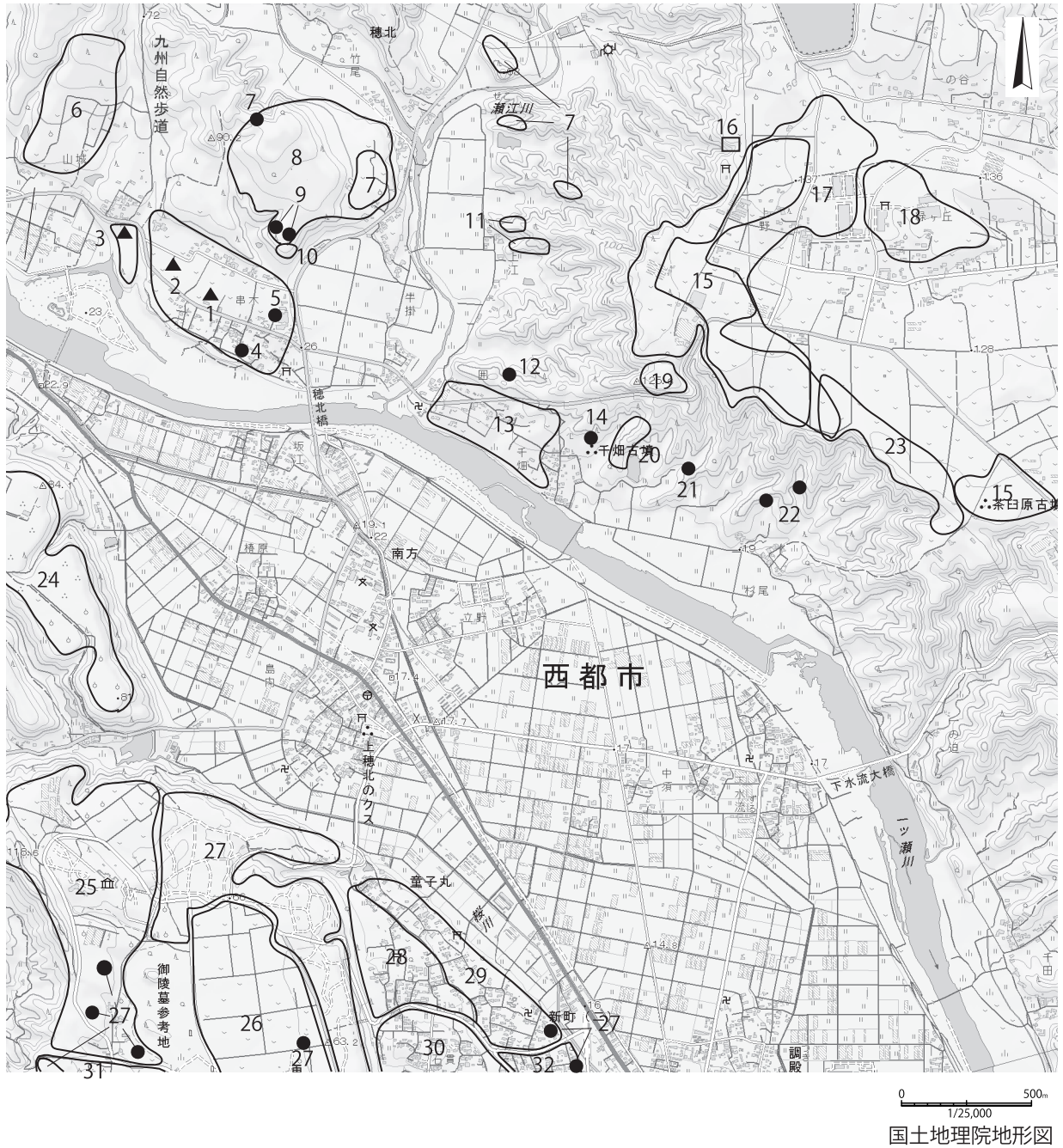
縄文時代は、串木第2遺跡で早期の集石遺構3基が検出され、遺構に伴っていないものの押型文・貝殻条痕文・塞ノ神式土器・曾畑式土器・草野式土器・三万田式土器等の様々な縄文土器や石錘が出土している。本遺跡や串木遺跡第4遺地点、左岸の宝財原遺跡（第1図24）においてもまとまった量の石錘の出土が認められていることから、この地域では漁撈活動が盛んに営まれていたことが推定できる。

弥生時代は、串木第2遺跡で下城式系の甕や有肩打製石斧を伴った不整円形プランの住居跡1軒、方形プランを基調とした住居跡2軒が検出されている。また、ほぼ同時期の住居跡としては、新田原遺跡（新富町教育委員会 1986）で花卉状住居跡や下城式系の弥生土器が確認されている。

古墳時代は、串木第2遺跡で住居跡1軒が検出されている。また、串木遺跡の北側には上穂北村古墳群（第1図7）が立地し、東側を南流する瀬江川を挟んだ対岸の茶臼原台地上には、前方後円墳3基・円墳52基で構成された茶臼原古墳群（第1図15）が分布する。さらに、茶臼原台地西側及び南側傾斜面には横穴式石室を有する前方後円墳である国指定の千畑古墳（第1図14）をはじめとし、数十基におよぶ横穴墓群が点在している。一ツ瀬川の対岸には、320基以上の古墳が分布する西都原古墳群（第1図27）が立地し、その中央部には九州最大の男狭穂塚・女狭穂塚古墳がその偉容を誇っている。

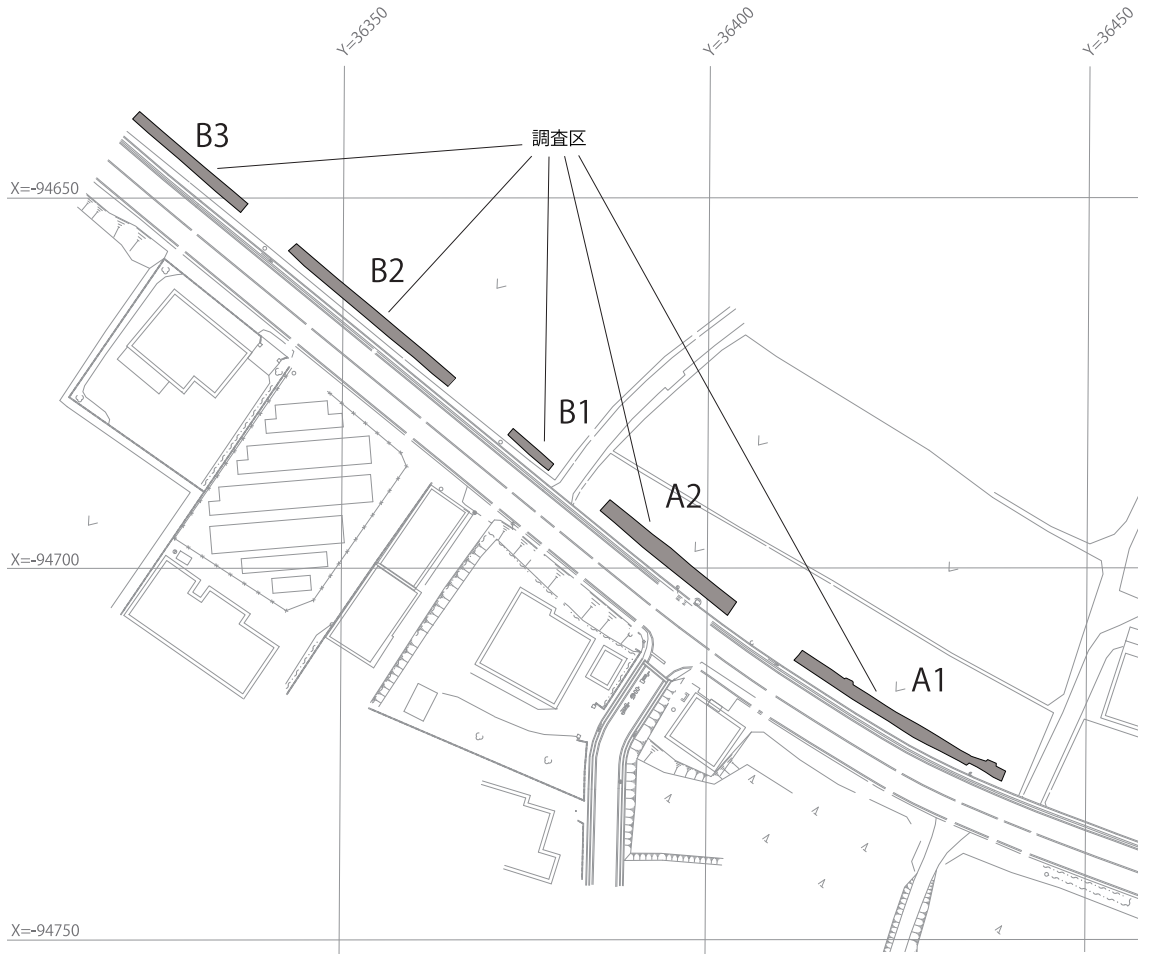
中世から近世は、集落跡やその生産基盤となる水田跡・畑跡の生産遺跡は確認されていないものの、周囲には中世の城館が多く確認されている。山城城跡は『日向地誌』における古城の別称が見られ、南東約2kmには伊東氏48城跡の一つに数えられる穂北城（第1図19）が遠望できる。

そのほか、串木第1遺跡の東側には穂北神社が存在し、西側には古くから寺があったと言い伝えられている。また、山城城跡東側の竹林中に、五輪塔などの石塔の所在が知られており、周囲に山城跡や寺跡関連遺構等が点在していた可能性が考えられる。

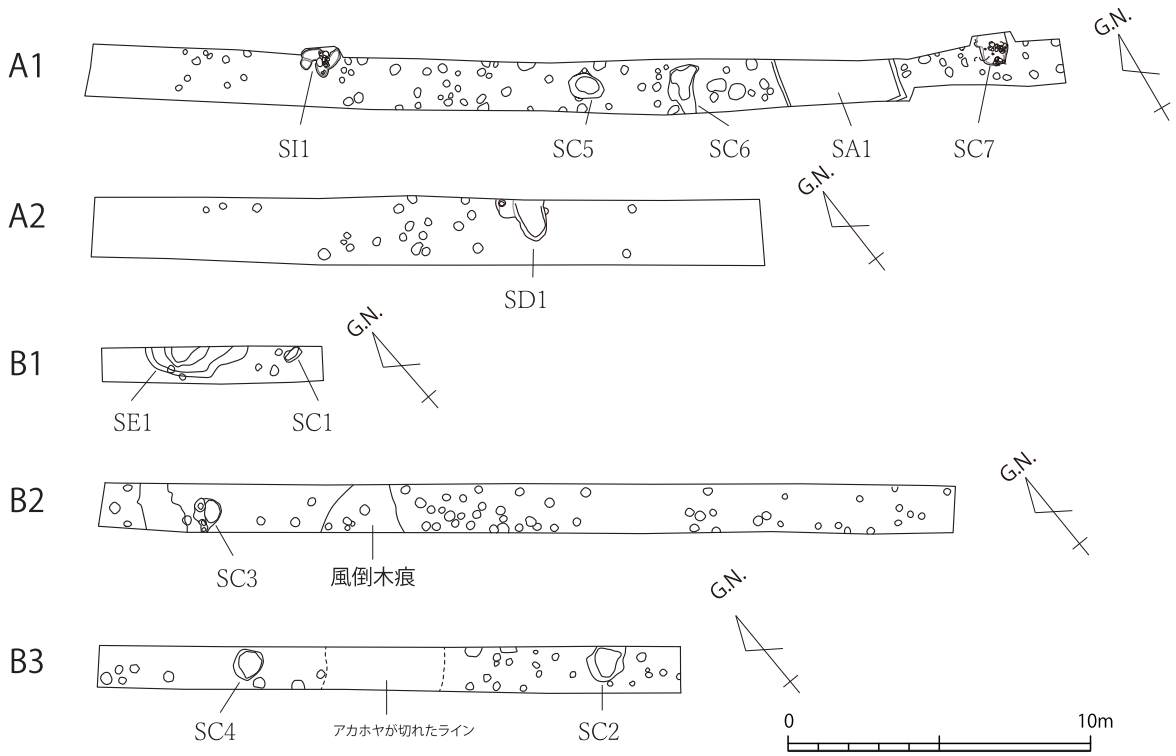
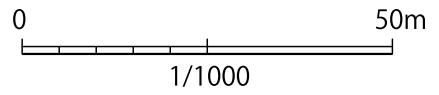


- | | | | | |
|-------------|-------------|-----------|-----------|------------|
| 1. 串木遺跡第3地点 | 2. 串木遺跡第4地点 | 3. 山城城跡 | 4. 串木第1遺跡 | 5. 串木第2遺跡 |
| 6. 平城遺跡 | 7. 上穂北村古墳群 | 8. 大木原遺跡 | 9. 大木原古墳 | 10. 串木横穴墓群 |
| 11. 上江横穴墓群 | 12. 囲横穴墓 | 13. 千畑遺跡 | 14. 千畑古墳 | 15. 茶臼原古墳群 |
| 16. 竹尾寺跡 | 17. 上野遺跡 | 18. 牧ノ原遺跡 | 19. 穂北城跡 | 20. 千畑横穴墓群 |
| 21. 松船横穴墓 | 22. 杉尾横穴墓 | 23. 轟遺跡 | 24. 宝財原遺跡 | 25. 丸山遺跡 |
| 26. 西都原遺跡 | 27. 西都原古墳群 | 28. 石貫遺跡 | 29. 童子丸遺跡 | 30. 堂ヶ島遺跡 |
| 31. 寺原遺跡 | 32. 法元遺跡 | | | |

第1図 串木遺跡第3地点周辺の主要な遺跡分布図



第2図 串木遺跡第3地点周辺地形



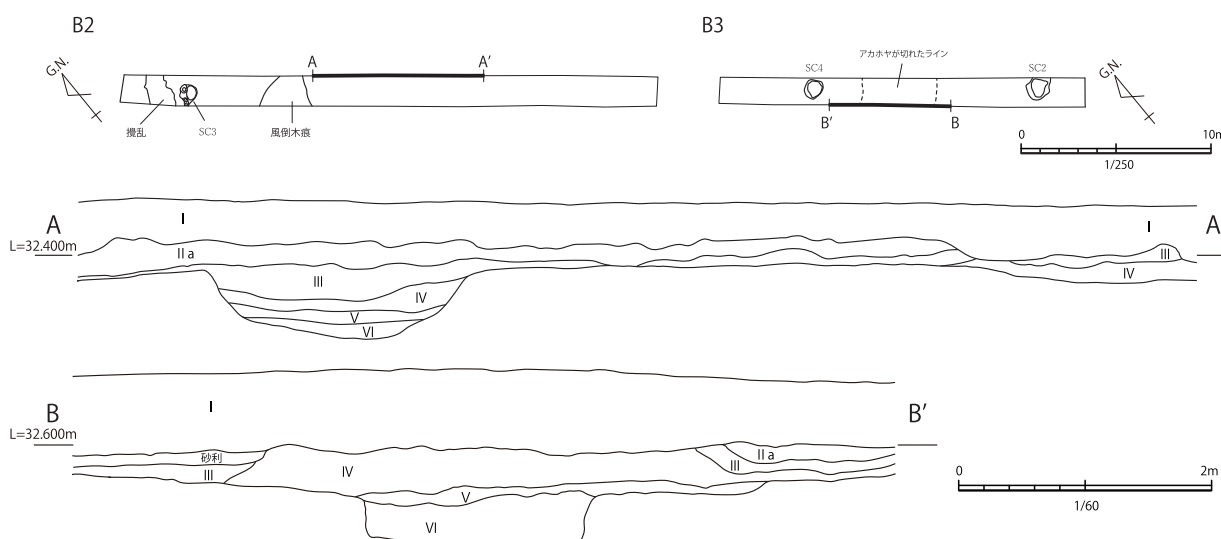
第3図 串木遺跡第3地点遺構全図

第三章 調査の成果

第1節 基本層序

調査対象地は、串木遺跡を東西に横断する県道杉安高鍋線の北側に隣接する、幅約0.9～2.3 m、長さ約110 mの狭小な範囲であり、耕作地として造成されていた。現地表面の標高は約32m～33mで、整地され比較的平坦であった。調査区全体として、鍵層となる鬼界アカホヤ火山灰層（Ⅲ層）が確認できたが、B1区はⅢ層が残存しておらず、V層で遺構検出した。主な基本層序は下記に示すとおりである。

I層	表土及（耕作土） 黒褐色土（Hue10YR3/1）
II a層	黒色土（Hue10YR2/1）水分を含む【遺物包含層】
II b層	黒色土（Hue10YR2/1）1～2mmのアカホヤブロックを1%含む【遺物包含層】
Ⅲ層	鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）（部分的に残存）
IV層	黒色土（Hue2.5YR2/1）水分を含む
V層	褐色土（Hue10YR4/4）しまりあり、水分を含む
VI層	灰黄褐色土（Hue10YR5/2）しまりあり、水分を含む



第4図 調査区土層断面図

第2節 遺構及び出土遺物の概要

(1) 遺構

古代の土壇墓1基、古墳時代の竪穴建物跡1基、土坑2基、縄文時代後期から晩期の土坑1基、時期不明の土坑4基、溝状遺構1条、配石遺構1基、小穴群が検出された。調査区自体は狭いが、比較的多くの遺構が検出されたことから、周囲に広く遺跡が展開しているものと考えられる。

(2) 遺物

土器類のうち出土位置を記録して取り上げたものだけでも縄文後期から晩期にかけての土器片270点、古墳時代から古代の土師器片272点、布痕土器片19点、陶磁器片16点、須恵器片10点であった。一括のものも含めると、口縁部が少なく限定的ではあるが、出土遺物の全体的な割合は縄文後期から晩期の土器5割、古墳時代の土師器3割、古代の土師器、須恵器、陶磁等が2割であった。

石器は161点で、ほぼ縄文時代のもと思われる。器種ごとでは、剥片67点、石錘33点、石斧17点、敲石11点、磨石9点、二次加工剥片8点、スクレイパー5点、石皿5点、微細剥離のある剥片2点、礫器2点、石包丁1点、砥石1点であった。さらに、石材別では、砂岩源ホルンフェルス60点、頁岩36点、砂岩32点、泥岩源ホルンフェルス19点、チャート6点、黒曜石4点、花崗斑岩2点、流紋岩2点であった。

第3節 古代の遺構と遺物

1 概要

古代の遺構としては、土壌墓1基が検出された。検出された墓壙内からは土師器の壺1点、坏9点（高台付2点）、刀子1点が出土した。

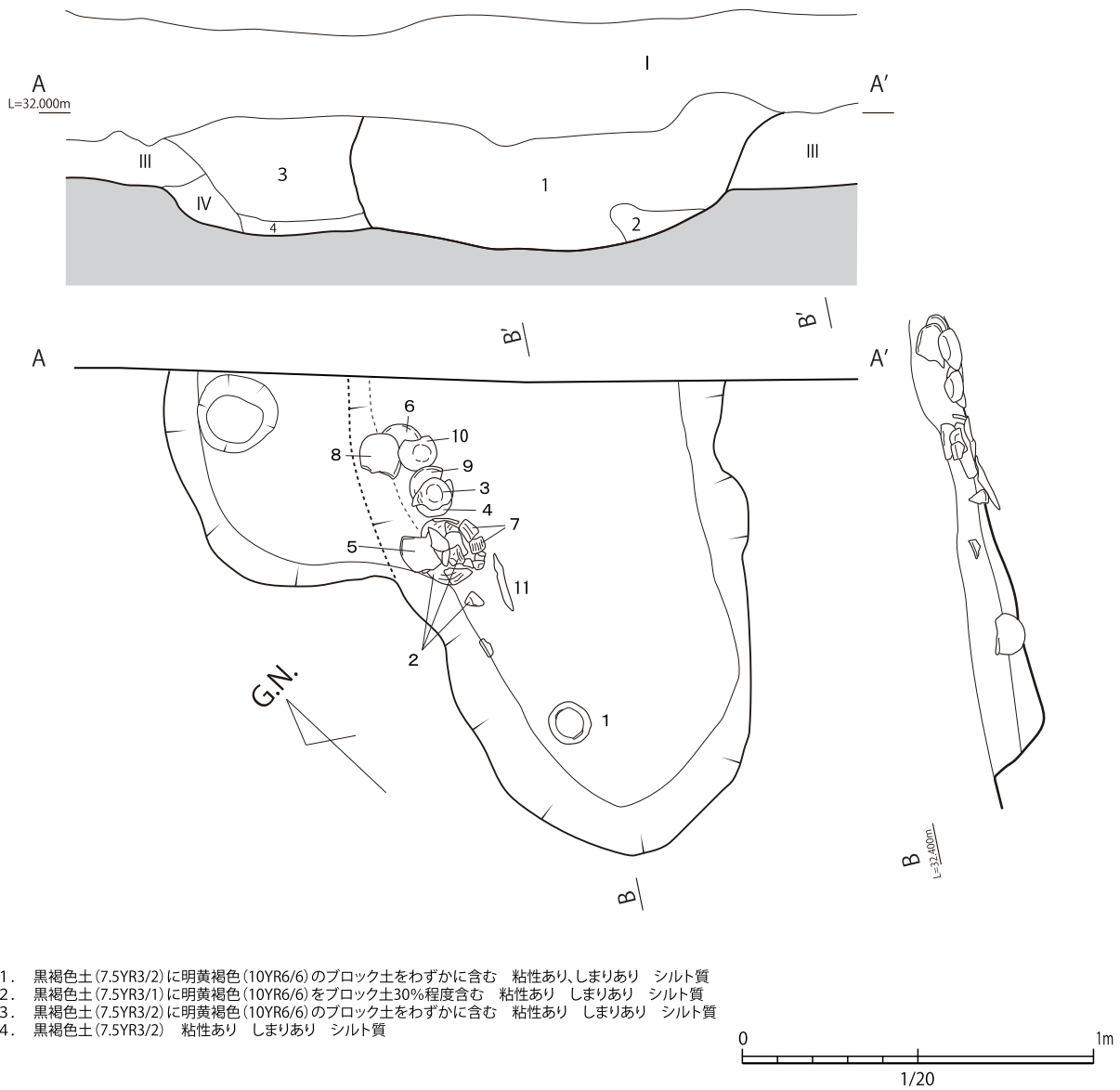
2 遺構

(1) 1号土壌墓（SD1）（第5図）

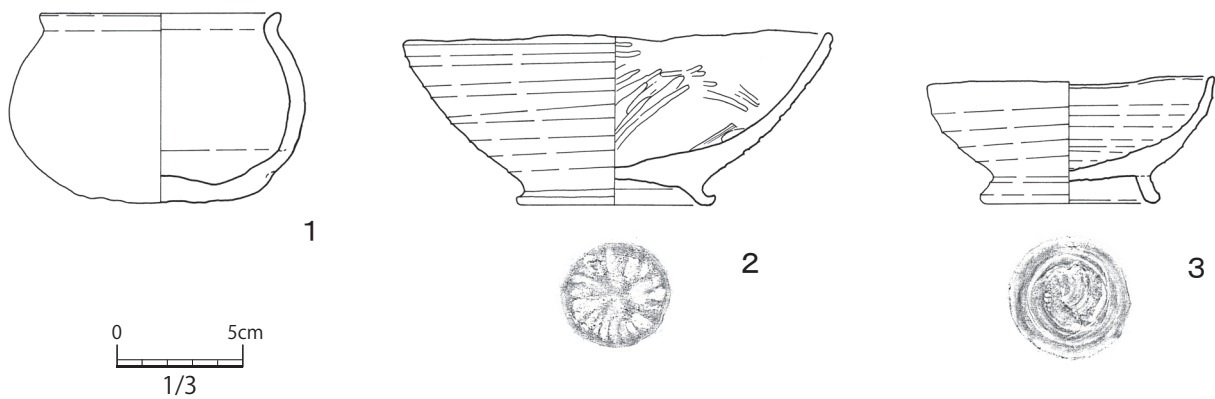
A2区Ⅲ層上面で検出された。平面は隅丸長方形で、約1/3は調査区外へのびていたため長軸は不明、短軸は0.76mである。床面は平坦で、検出面からの深さ0.16mを計る。北側に土壌墓床面とほぼ同じ深さで広がる約0.5m四方の平面プランが確認でき、古墳時代の土師器片が2点出土した。土層断面からより古い時期の掘り込みの一部であると考えられる。また、掘り込み北端に直径約0.24m、床面からの深さ約0.25mの小穴1基が検出された。小穴内から古代の土師器小片が3点出土した。

土壌墓出土遺物のうち11点を図化掲載する。1～10は古代の土師器である。1は小型の広口壺である。丸みのある胴部に口縁部は短く外反する。内外面に横ナデ、底部は粗雑であるがヘラ切り後工具ナデが施されている。外面胴部下部に指頭痕が残る。土器外面の口縁部から底部まで厚くススが付着している。2～10は坏である。2・3は高台を呈する。2は両黒で内外面に黒化調整を施す。口径16.9cm、底径7.5cm、器高6.9cmである。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸みを帯び、ナデ調整が施されている。内外面ともに回転ナデ後のミガキ調整が見られる。また、底部内面にミガキ後指頭痕が残る、外面には高台放射状調整痕が認められる。3はヘラ切り底で、口径11.45cm、底径6.75cm、器高5.0cmを計る。体部はやや内湾しながら立ち上がり、外面に1mm以下の黒色物が多く付着している。4は底径6.8cmのヘラ切り底で、内外面に回転ナデが調整が見られる。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸みを帯びている。内外面の広範囲に黒斑が認められる。5～10はいずれもヘラ切り底で、内外面に回転ナデを施す。体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。法量は口径10.0cm～10.75cm、底径5.05cm～6.75cm、器高2.4cm～3.25cmを計り、いずれも同等の大きさである。11は鉄製の刀子である。土師器が集中する部分の東側に出土した。全長17.05cm、茎部6.05cmである。両関で茎部に木質が残る。

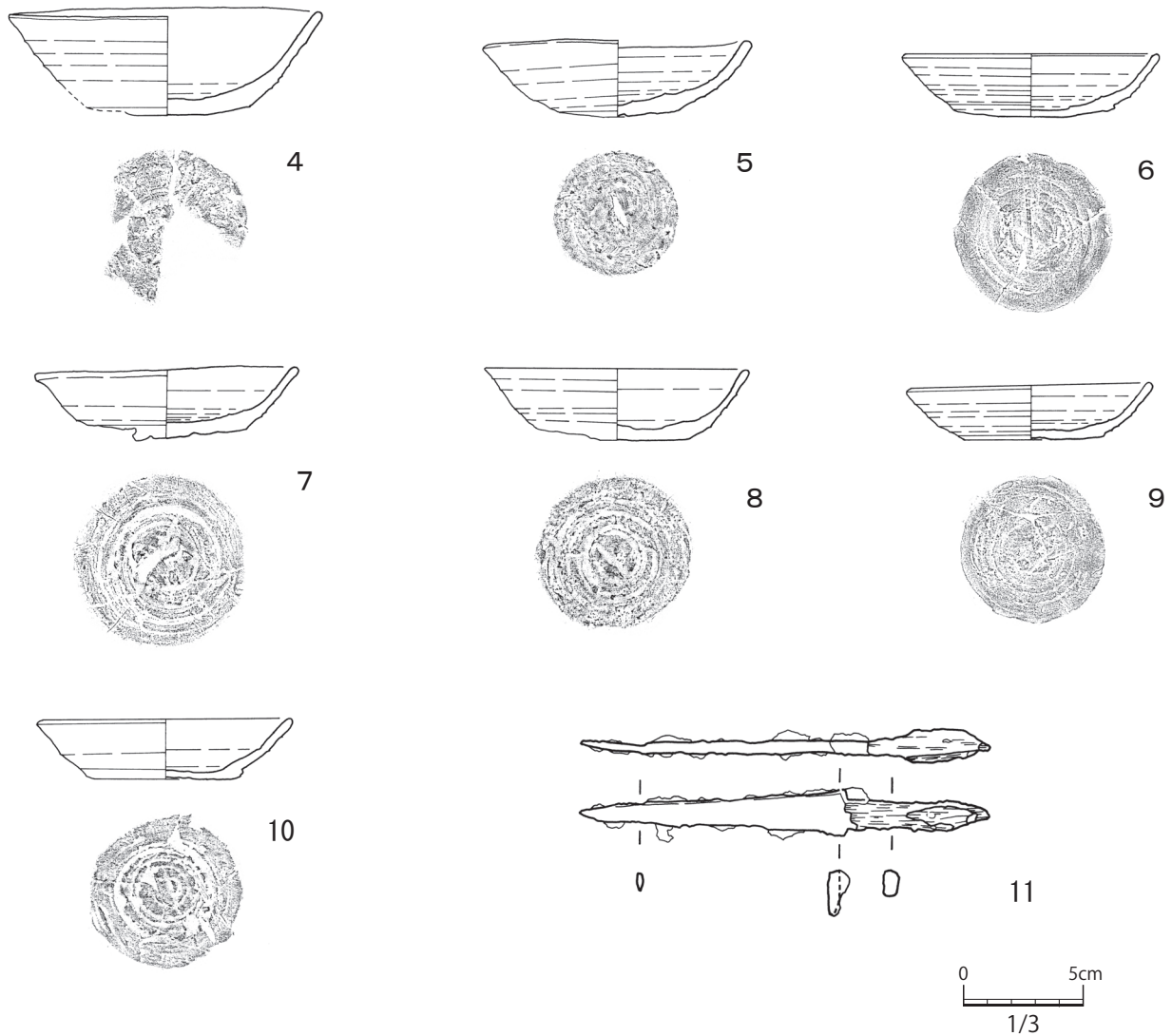
土器の形態的な特徴から平安時代（10世紀前半）の遺構と考えられる。1・2・4について、炭化物を採取し（1は2箇所）、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った結果、1は1140±20年BP（AD874～987）、1160±20年BP（AD822～904）、2は2540±20年BP（BC795～747）、4は2180±20年BP（BC359～276）の年代値が得られた。2・4については、土器の表面を薄く削り取って測定試料としたため、土器胎土に含まれた古い炭素が測定に影響しているものと思われる。



第5図 SD 1 実測図



第6図 SD 1 出土遺物①



第7図 SD1出土遺物②

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1 概要

古墳時代の遺構としては、竪穴建物1基、土坑2基が検出された。各遺構からは、古墳時代の土師器片、石錘や敲石、石皿が出土した。いずれも出土した土器から時期決定を行った。

2 遺構

(1) 1号竪穴建物 (SA1) (第8図)

A1区東側Ⅲ層上面で検出した。竪穴建物の約60%は調査区外に広がっており詳細な規模等是不明であるが、一辺約4mの方形プランと推定される。床面に明確な貼床や柱穴は確認できない。埋土は黒色系粘質土で6層に分けられる。レンズ状に堆積しており、自然に埋没していったことが伺える。サブトレンチ掘削中、北壁面西側に遺構埋土と異なる2層の土層が確認できた。切り合い状況から竪穴建物より前の時期のものである。遺物は、古墳時代の壺1点、土師器片6点、縄文土器片6点、石器3点が

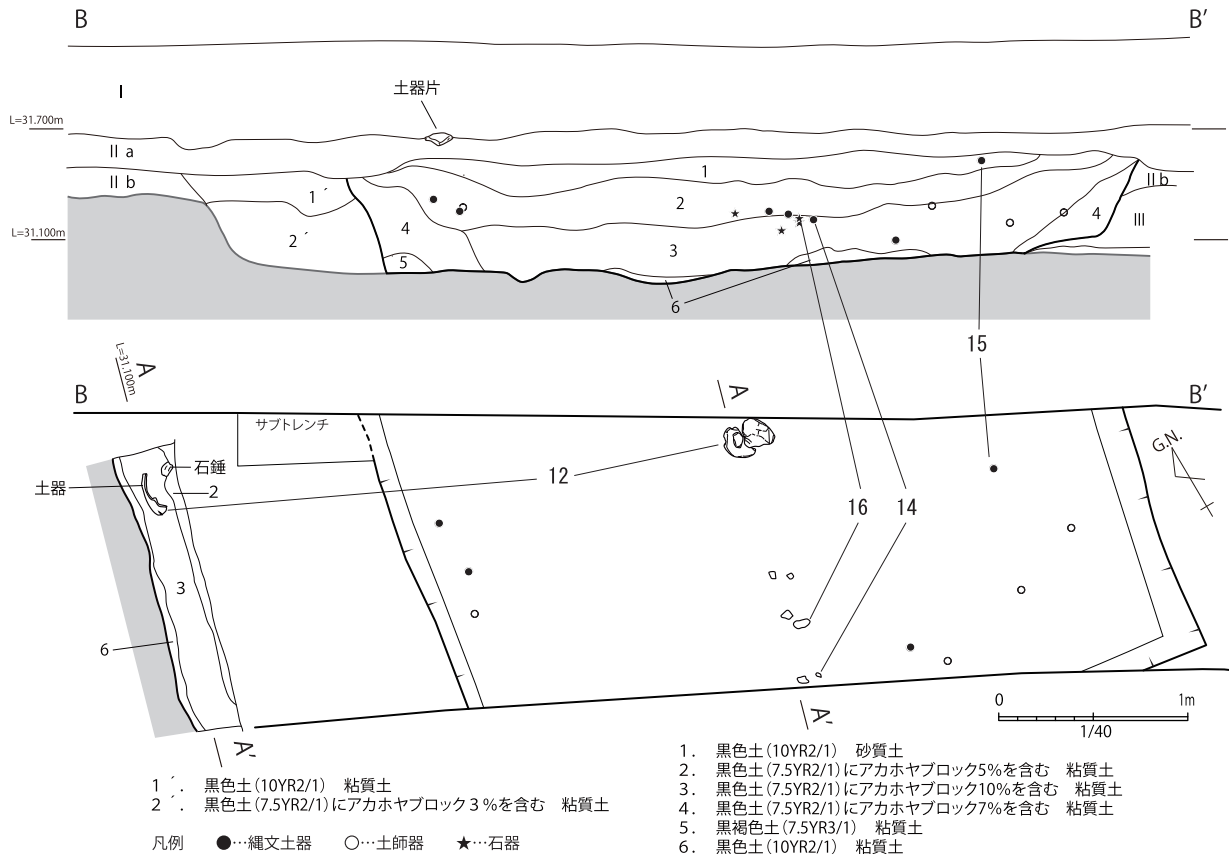
出土した。そのうち4点を図化掲載する。12は古墳時代の壺の口縁部から胴部である。口縁部約1/8、胴部約1/2が残存しており、推定口径は14.8cmである。外面頸部に横ナデ、胴部に工具ナデが施されている。また、指頭痕が残り、凹凸で粗い。内面は縦、横、斜方向のナデ調整で、指頭痕が残る。丸みのある胴部に口縁部は短く外反する。土層観察用ベルト内の床面近くで出土しており、遺構の時期決定の根拠とした。土器の特徴から古墳時代後期（6世紀後半）のものと考えられる。13～15は縄文土器である。13は深鉢の口縁部である。外面調整は風化のため不明であるが貼付突帯が認められる。内面は横ナデが施されており、黒斑が見られる。14は浅鉢の口縁部である。内外面とも風化しているが、ミガキ調整が確認できる。15は深鉢の底部である。内外面ともにナデ調整が施されており、外面は斜方向の工具痕が一部に残る。内面にはススが多量に付着している。16は砂岩製の敲石で両端部に打痕が明瞭に認められる。

(2) 3号土坑 (SC3) (第9図)

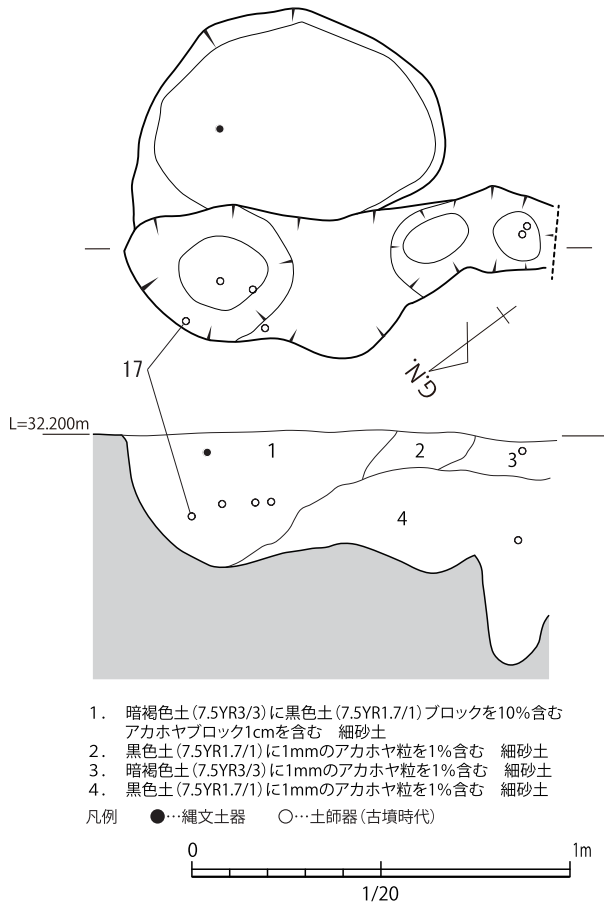
A2区西側Ⅲ層上面で検出した。遺構東側の上端長軸0.78m、深さ0.04mの浅い土坑を切る形で掘り込まれている。平面は西側がやや張り出す不整な長方形で、遺構南側が調査区外へ続いており、長軸は不明である。短軸は0.37mである。土坑の北端に直径約0.37m、深さ0.34mの小穴1基、南端に直径0.24m、深さ0.37mの小穴1基、直径0.19m、深さ0.52mの小穴1基が確認できた。遺物は古墳時代の土師器片6点、縄文土器片1点が出土した。遺物の時期にばらつきがないため時期決定の参考としているが、遺物が床面直上から出土していないことに加え、埋土の堆積状況が一方向からであり人為的であると考えられることから、埋土中に含まれた遺物が混入した可能性が高い。よって、遺物は遺構年代の上限を示すにすぎず、より新しい時期の遺構の可能性も否定できない。1点を図化掲載する。17は土師器小型壺の口縁部である。内外面に横方向のナデ、内面に一部に斜方向のナデが認められる。直線的に立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。

(3) 4号土坑 (SC4) (第10図)

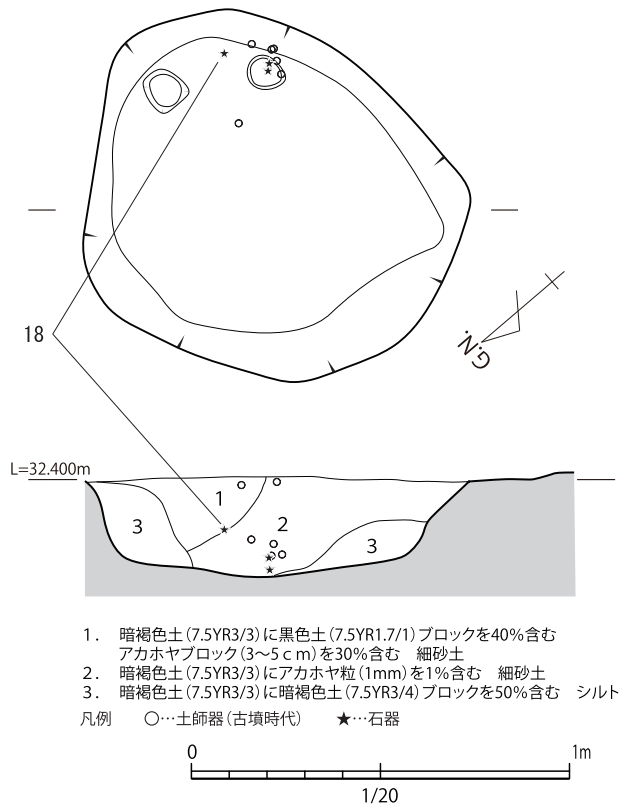
A3区西側Ⅲ層上面で検出した。平面は不整な楕円形で、上端は長軸1.06m、短軸0.93mで、深さ0.26mである。長軸は南北方向をとる。土坑の南東部には、直径約0.1mで検出面からの深さ約0.3mの小穴が2箇所確認できたが、検出状況から本遺構よりも以前に掘り込まれたものとする。遺物は古墳時代の土師器片6点、石器3点が出土した。3号土坑と同様に、遺物の時期にばらつきがないため時期決定の参考としているが、床面直上から出土していないため、より新しい時期の遺構の可能性も否定できない。1点を図化掲載する。18は砂岩製の敲石である。両端と断面三角状の頂部に敲打痕が明瞭に認められる。



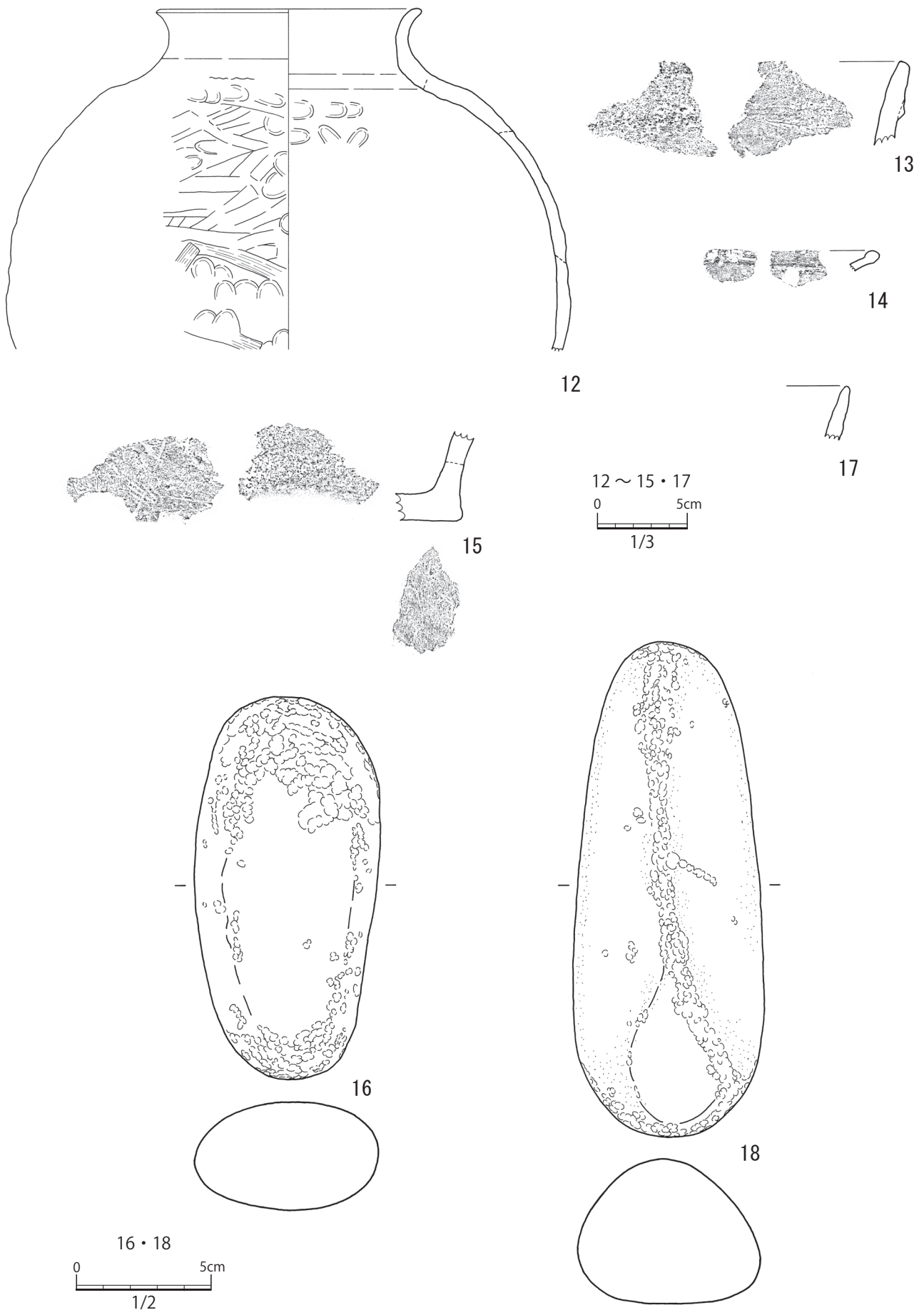
第8図 SA1実測図



第9図 SC3実測図



第10図 SC4実測図



第 11 図 古墳時代の遺物

第5節 縄文時代後期から晩期の遺構と遺物

1 概要

縄文時代後期から晩期の遺構としては、土坑1基が検出された。遺構内からは、縄文土器、石斧、石錘などがまとまって出土した。

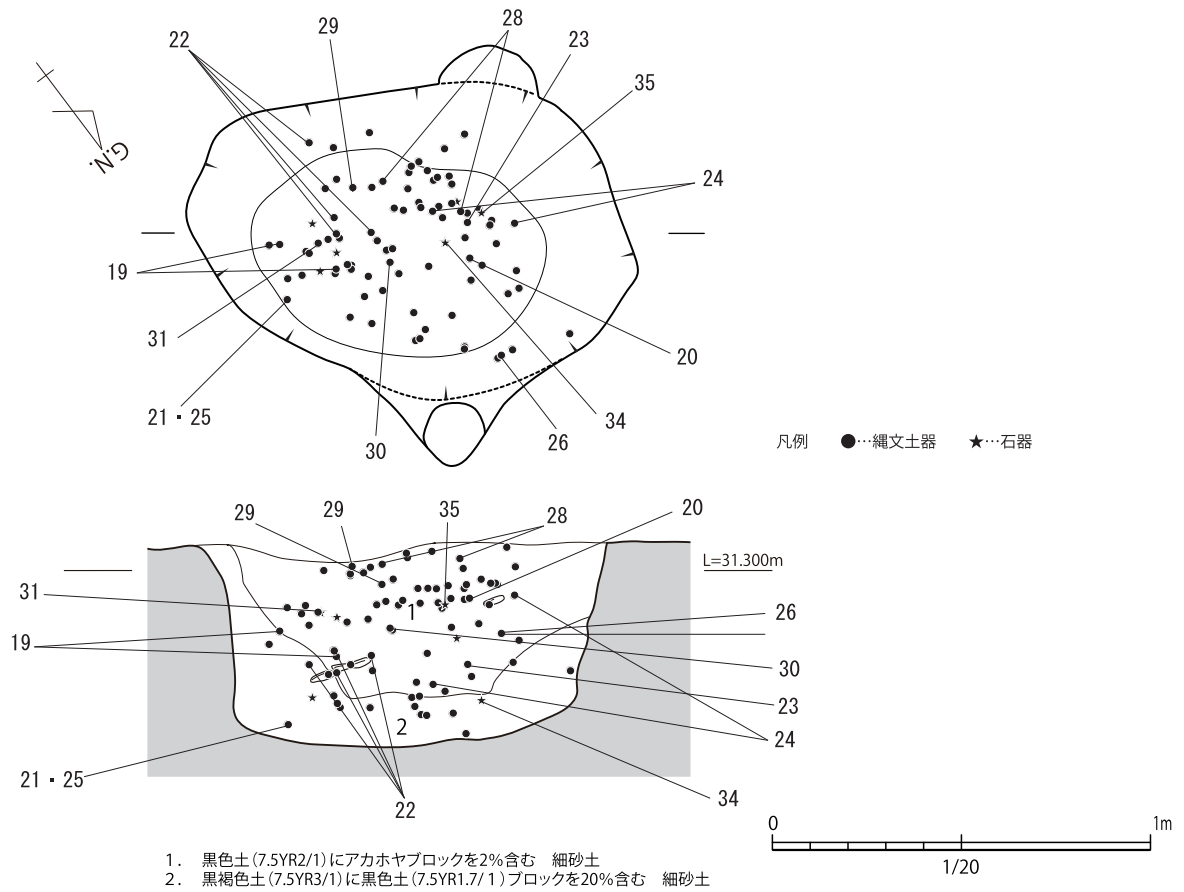
2 遺構

(1) 5号土坑（SC5）（第12図）

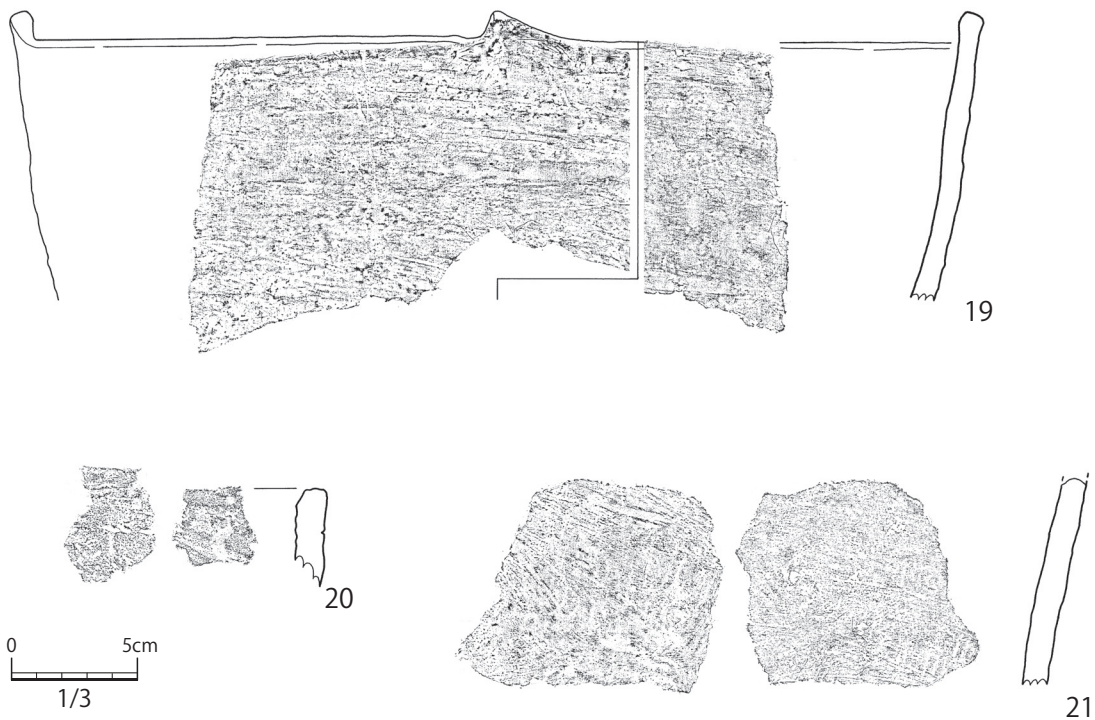
A1区Ⅲ層上面で検出された。平面形は不整な楕円形で長軸1.15m、短軸0.83m、地表面からの深さ0.51mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。位置情報を記録して取り上げたものだけでも、縄文土器83点、石斧2点、石錘2点が出土した。そのうち18点を図化掲載した。

19～32は縄文土器である。19～24は深鉢、25～32は浅鉢である。19は口縁部から胴部である。推定口径は37.4cmで、わずかに内湾しながら立ち上がる。口縁端部に鱗状突起を有する。内外面に工具による横、斜方向のナデを施す。外面にスス、内面に炭化物が付着する。20は口縁部である。口縁は垂直に立ち上がり、口唇部は削りに近い横ナデを施す。外面に爪による不規則な刺突が認められる。21は胴部で直線的に立ち上がる。外面は工具による斜方向の粗いナデを施し、ススが少量付着する。内面には横、斜方向のナデ調整が認められる。22は口縁部から胴部で、口縁部は僅かに肥厚する。外面口縁部に粗い横ナデ、胴部に工具による横、斜方向のナデを施し、口縁部から胴部上面にかけてススが付着する。内面は口縁部から胴部にかけて工具による横方向のナデが認められる。23～25は口縁部である。23の口縁は直線的に立ち上がり、外面に貼付突帯、内面に横ナデが施されている。外面突帯上部から内面にかけて黒変が認められる。24の口縁は緩やかに外反しながら立ち上がり、外面に貼付突帯、内外面に横方向の条痕が認められる。25は外側へ大きく開き、ほぼ水平となる口縁上面に斜方向の細い沈線文、その内側に刺突文が施され、沈線文の周辺に黒斑が認められる。外面はナデ調整を施す。26～28は口縁部から胴部である。26は推定口径44cm、27は推定口径32.8cmで、頸部でく字形に強く屈曲し、短く外反する口縁と強く張る肩部から内湾して胴部へ続く。調整は内外面にミガキを施す。27は口縁内部に沈線を、頸部下部に穿孔を有する。28は内外面に斜方向のヘラミガキを施し、黒斑が見られる。口縁部内面には横方向のヘラミガキを施す。29は口縁部で、外面口縁下部に一条の沈線が巡る。内外面に横方向のヘラミガキを施す。30は口縁部から胴部で、口唇部にリボン状突起を持ち、肩上部に沈線が巡る。推定口径6.2cm、胴部最大径7.2cmである。外面は口縁部に横方向のナデ、胴部に縦方向のナデを施す。内面は口縁部から胴部にかけて横ナデ調整が認められる。31は口縁部から胴部である。ほぼ直線的に立ち上がる。内外面に丁寧なナデ調整を施し、黒斑を有する。口縁下部に二条の細沈線が認められる。口唇部は丸く仕上げる。32は口縁部である。口唇部はやや肥厚し、一条の沈線が巡る。内外面にナデ調整を施し、黒変が確認できる。

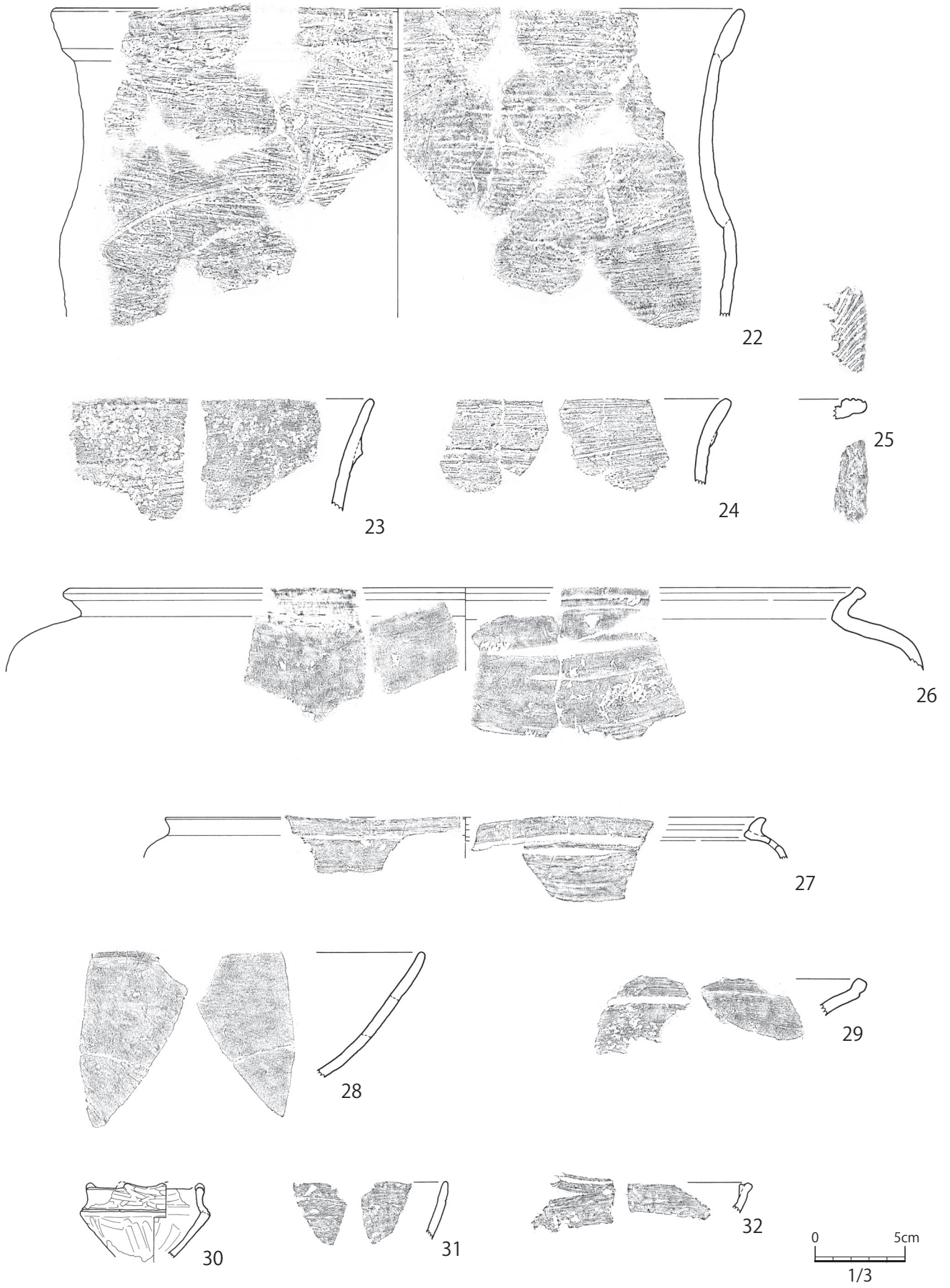
33・34は泥岩源ホルンフェルス製の打製石斧である。33は完形で、基部よりもやや刃部が広い短冊形を呈する。34は刃部を形成しておらず未製品であるが、撥型に開く形状を意図したものと考えられる。35・36は切目石錘である。35は砂岩製、36は泥岩源ホルンフェルス製である。ともに重さは約30g程度で、漁網錘として用いられたと考えられる。



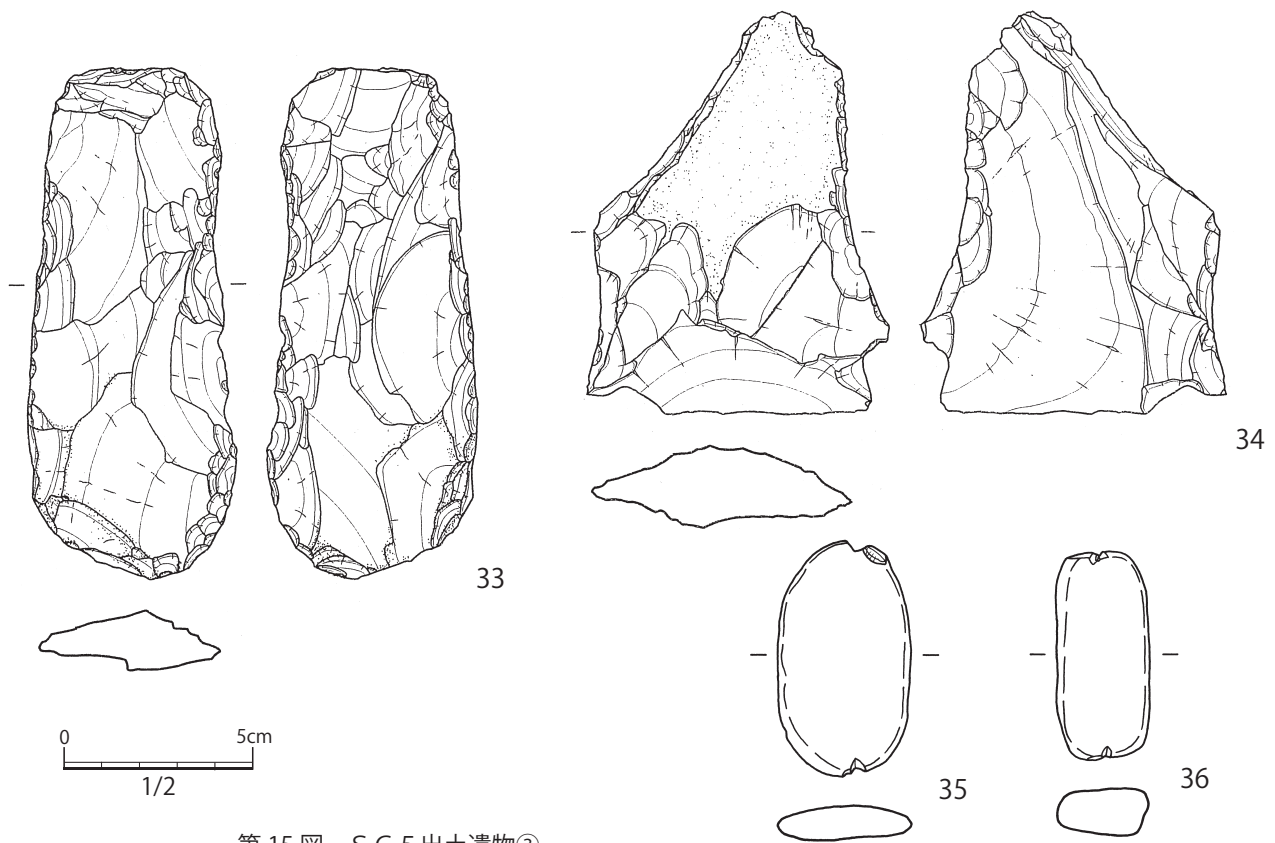
第12図 SC5実測図



第13図 SC5出土遺物①



第14図 SC5出土遺物②



第15図 SC5出土遺物③

第6節 時期不明の遺構と遺物

1 概要

土層断面から明確な堀込みの上端を確認できない、出土遺物が周囲からの流れ込みの可能性が高く、詳細な時期を確定できない等の理由から、土坑4基、溝状遺構1条、集石遺構1基、小穴群を時期不明の遺構とした。各遺構から出土した遺物は、図化に耐えられるものを掲載する。

2 遺構

(1) 1号土坑 (SC1) (第16図)

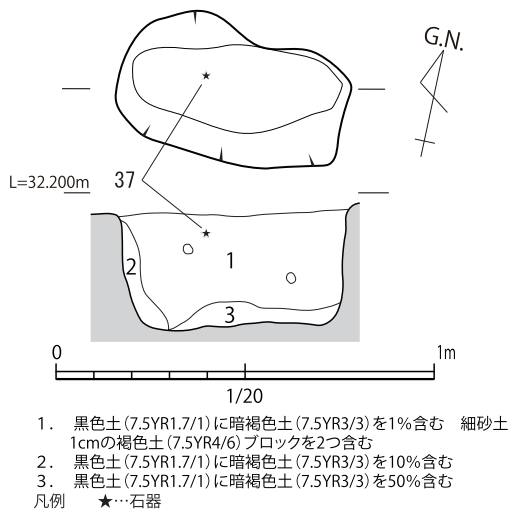
B1区は串木遺跡第3地点における主な遺構検出面であるⅢ層（アカホヤ火山灰層）が残存しておらず、Ⅳ層を人力により掘削し、Ⅴ層上面で遺構検出を行った。1号土坑（SC1）はB1区東側で検出された。平面はやや不整な長方形である。上端で長軸0.6m、短軸0.3m、深さは0.28mである。埋土は黒色土を主とし、砂粒をわずかに含む。遺物は石器が1点出土した。37は頁岩製の石錘である。形状は楕円形に近く、長軸両端に打ち欠きを有する。

(2) 2号土坑 (SC2) (第17図)

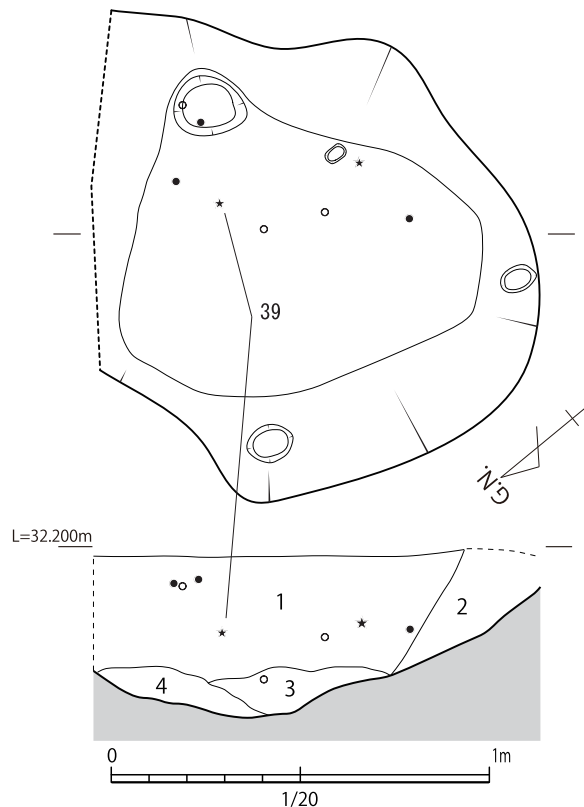
B3区東側Ⅲ層上面で検出された。平面は不整な楕円形と推定されるが、遺構北側が調査区外へ続いており、長軸は不明である。短軸は上端で1.1m、下端で0.7mである。出土遺物のほとんどは周囲からの流れ込みの可能性が高い。縄文土器片11点、古墳時代の土師器片17点、古代の土師器片12点（小片8）、石器2点が出土した。このうち2点を図化掲載した。38は縄文土器浅鉢の口縁部である。外反しながら立ち上がり、口縁部でわずかに屈曲する。内外面に横方向のヘラミガキが施されている。39はチャート製のスクレイパーである。一部自然面を残す横長剥片で、下縁両面に刃部を形成している。

(3) 6号土坑 (SC6) (第18図)

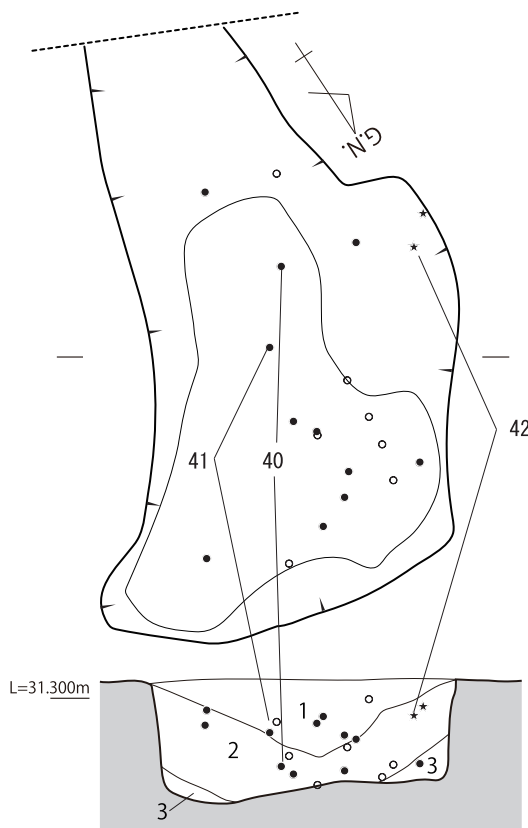
A1区SC5東側Ⅲ層上面で検出した。平面形は不整な長方形で、遺構南端が調査区外へ延びており、上端の長軸は不明である。短軸は上端1.34m、下端0.8mを測る。遺物は縄文土器片20点、古墳時代の土師器片22点、古代の土師器片6点、石器3点が出土した。このうち3点を図化掲載した。40・41は縄文土器である。40は深鉢口縁部である。わずかに外反しながら立ち上がり、外面に工具による横ナデを施し、口縁部下に貼付突帯を持つ。黒斑が見られる。41は浅鉢口縁部である。頸部でく字形に屈曲し、口縁は短く立ち上がる。内外面の口縁部下に沈線を施し、横方向のヘラミガキが認められる。内面は接合面で剥離している。口くの字状に外反し、短く立ち上がる。42は砂岩源ホルンフェルス製の石錘で、長軸両端を打ち欠いている。非常に硬質で、最大長5.0cm、幅10.3cm、厚2.3cm、重量189.9gと本遺跡で出土した石錘のうち最重量である。



第16図 SC1実測図



第17図 SC2実測図



第18図 SC6実測図

(4) 7号土坑 (SC7) (第19図)

A1区東側Ⅲ層上面で検出した。遺構内の中位から上位に5cmから15cmの礫が40個ほど検出された。赤変した礫の確認はできない。土層断面から確認できる埋土の堆積状況、検出された礫の位置と土坑の掘り込み位置が異なることから、掘り込まれた土坑へ廃棄された礫であると判断した。遺構に伴う遺物は3点出土した。43は東播系須恵器の口縁部から胴部である。内外面に回転ナデを施す。直線的に立ち上がる口縁上部に自然釉が認められる。44は坏底部である。残存率約1/3で、推定底径は7.1cmである。内外面ともに風化のため調整は不明である。45は縄文土器の深鉢口縁部である。緩やかに外反して立ち上がる口縁部下に貼付突帯を施す。内外面は横方向のナデ調整で、外面にススが付着し、内面は黒変が見られる。

(5) 1号溝状遺構 (SE1) (第20図)

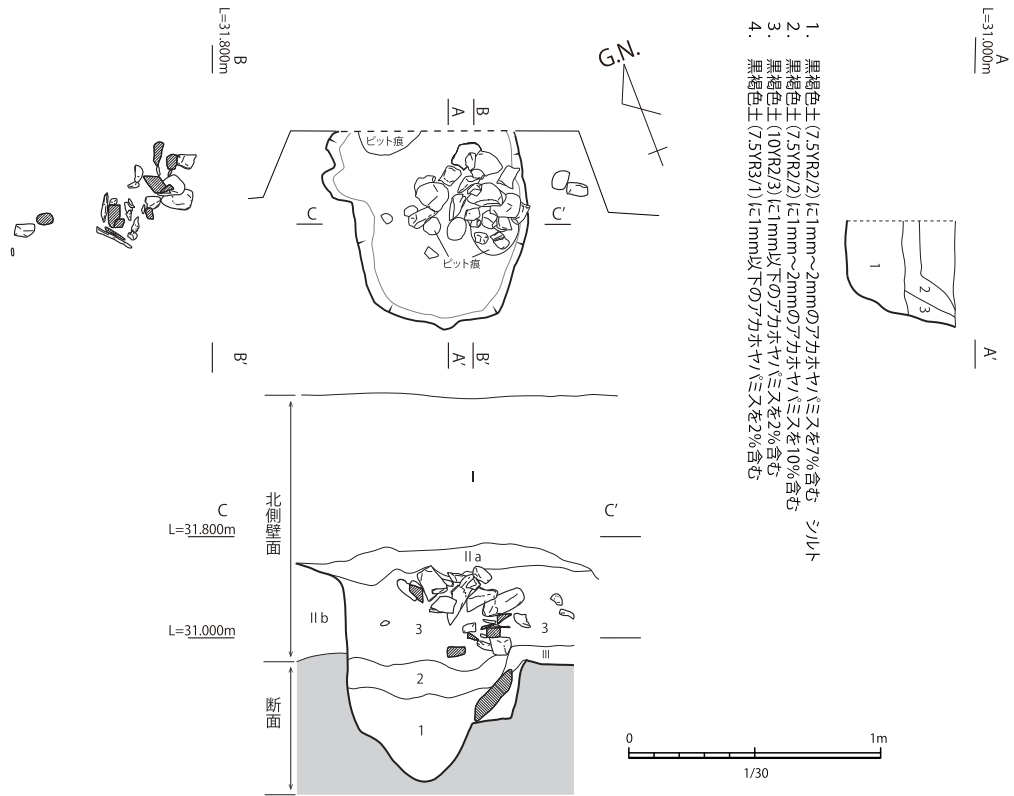
SC1と同様にB1区V層上面で検出した。部分的な検出であり全体形は不明であるが、調査区内で確認できた遺構の規模は、全長約3.1m、最大幅1.0m、深さ約0.07mから0.25mである。北西壁より南に向かい北東に屈曲する。埋土は黒色土を含む細砂土である。調査区は全体的に南側に向けて傾斜する地形であるため、自然流路ではなく何らかの人為的な痕跡であると考えられるが、用途及び年代については不明である。遺物は縄文土器片が6点、古墳時代の土師器片が3点出土した。46は縄文土器の浅鉢胴部である。外傾しながら直線的に立ち上がり、肩部でく字状に屈曲する。内外面に横、斜方向のヘラミガキを施し、外面に黒斑、赤斑が認められる。

(6) 1号配石遺構 (SI1) (第21図)

A1区東側Ⅲ層上面で検出した。北から南にかけて傾斜しながら扁平な石が面を揃えるように配されている。石は30cmほどの人頭大のものが多く、5cmから10cmの拳大のものが数個見られる。礫の上面は受熱により赤変しているが、埋土中に炭化物は検出されていない。串木第1遺跡1次調査(1991 西都市教育委員会)第2トレンチ検出の配石状遺構と類似している。全ての礫を除去すると浅い掘り込みが見られ、長軸0.75m、短軸0.54mの楕円形プランとなった。土器等の遺物は出土していない。

(7) 小穴群 (第22図)

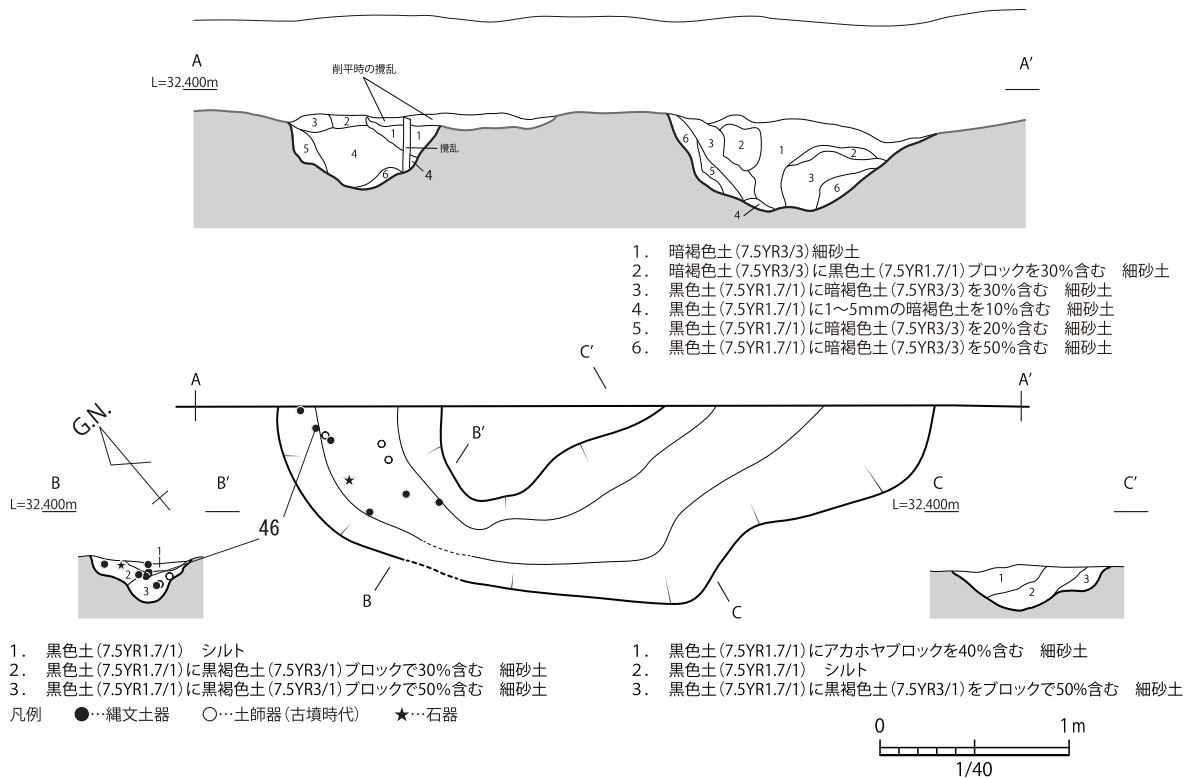
串木遺跡第3地点では、調査区の全体に94基の小穴群が確認された。小穴は径0.09mから0.55mで検出面からの深さは約0.1mから0.6mである。調査区の狭さに起因して、掘立柱建物や柵などを認定することは困難であった。ここでは、遺構分布状況と出土遺物の概要を提示する。遺物は縄文土器片、古墳時代や古代の土師器片、布痕土器片、石器が出土した。このうち2点を図化掲載した。47は古代の坏口縁部である。直線的に立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。内外面に回転ナデ調整を施す。48は縄文時代の浅鉢である。口縁部は外傾し、ほぼ水平となる口唇部上に竹管状工具による二列の刺突文を施す。外面は横方向の粗いナデ調整である。



1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) に 1mm~2mm のアカホヤバミスを 7% 含む シルト
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) に 1mm~2mm のアカホヤバミスを 10% 含む
3. 黒褐色土 (10YR2/3) に 1mm 以下のアカホヤバミスを 2% 含む
4. 黒褐色土 (7.5YR3/1) に 1mm 以下のアカホヤバミスを 2% 含む

1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) に 1mm~2mm のアカホヤバミスを 7% 含む シルト
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) に 1mm~2mm のアカホヤバミスを 10% 含む
3. 黒褐色土 (7.5YR3/1) に 1mm 以下のアカホヤバミスを 2% 含む

第 19 図 SC7 実測図

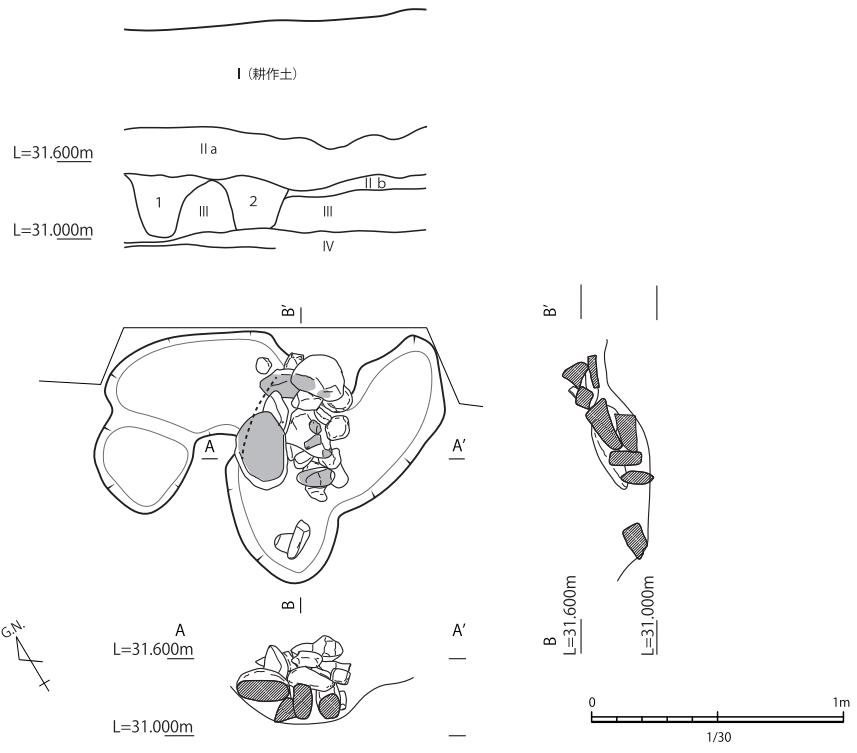


1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 細砂土
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) に 黒色土 (7.5YR1.7/1) ブロックを 30% 含む 細砂土
3. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に 暗褐色土 (7.5YR3/3) を 30% 含む 細砂土
4. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に 1~5mm の暗褐色土を 10% 含む 細砂土
5. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に 暗褐色土 (7.5YR3/3) を 20% 含む 細砂土
6. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に 暗褐色土 (7.5YR3/3) を 50% 含む 細砂土

1. 黒色土 (7.5YR1.7/1) シルト
 2. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に 黒褐色土 (7.5YR3/1) ブロックを 30% 含む 細砂土
 3. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に 黒褐色土 (7.5YR3/1) ブロックを 50% 含む 細砂土
- 凡例 ●…縄文土器 ○…土師器 (古墳時代) ★…石器

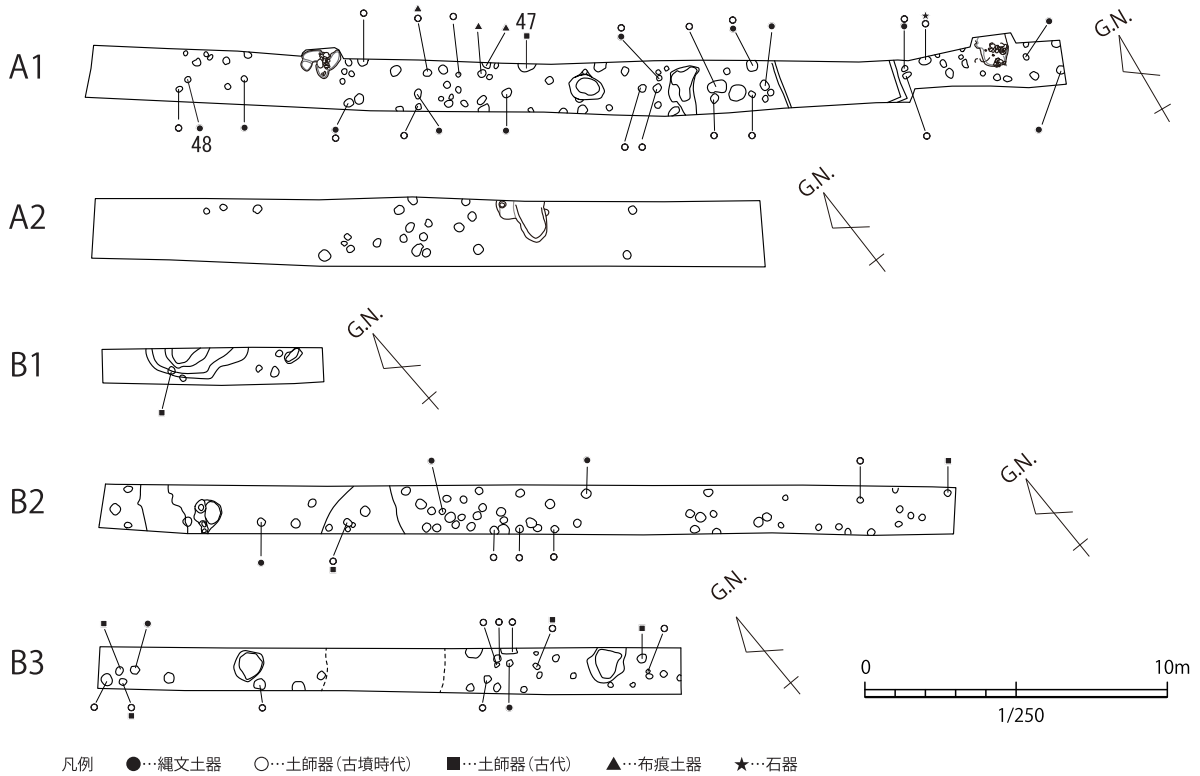
1. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に アカホヤブロックを 40% 含む 細砂土
2. 黒色土 (7.5YR1.7/1) シルト
3. 黒色土 (7.5YR1.7/1) に 黒褐色土 (7.5YR3/1) を ブロックで 50% 含む 細砂土

第 20 図 SE1 実測図



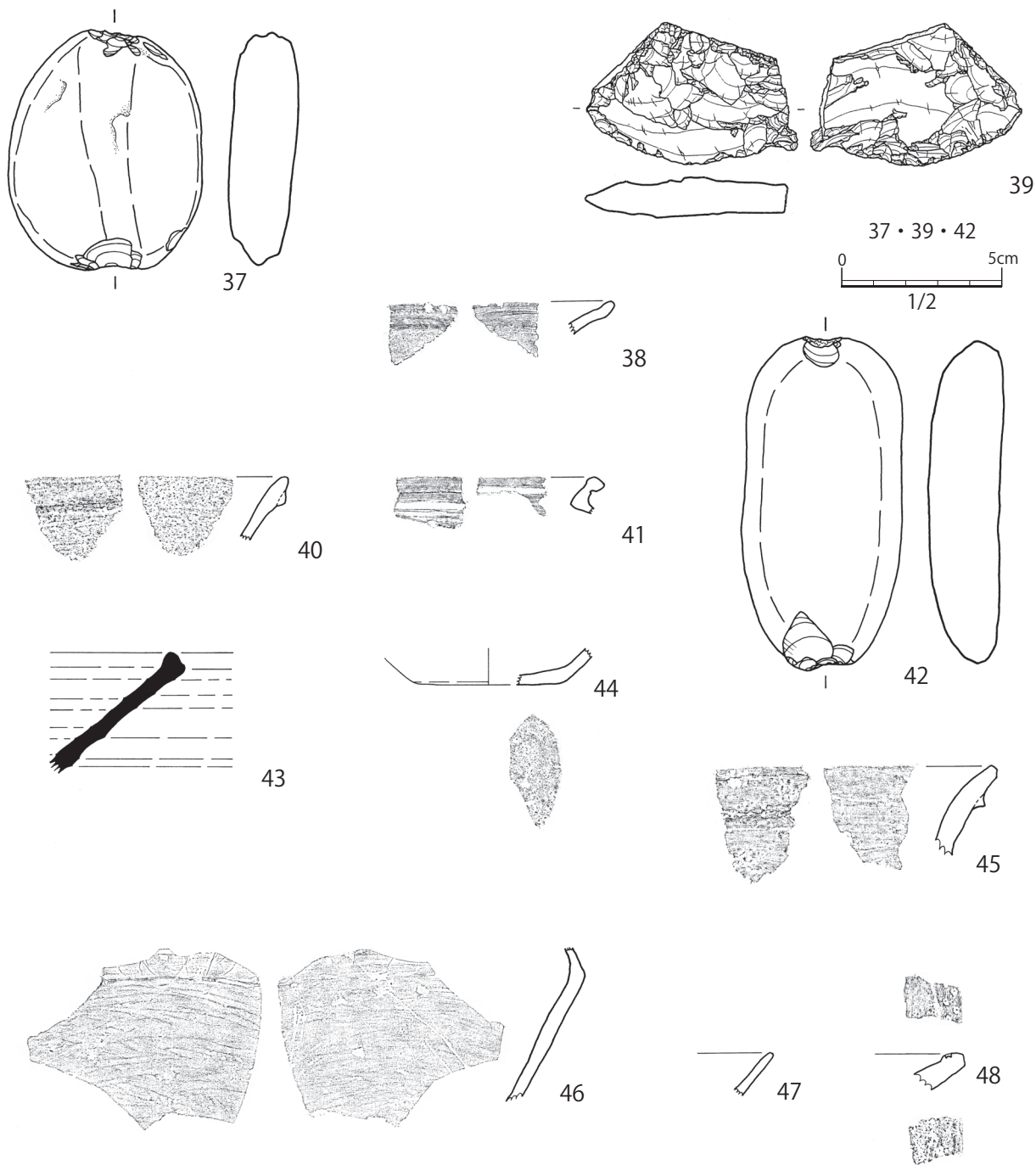
1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) に1~2mmのアカホヤバミスを5%含む
 2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) に1~2mmのアカホヤバミスを7%含む
- 凡例 トーンは赤変部位

第21図 S I 1 実測図



- 凡例 ●…縄文土器 ○…土師器(古墳時代) ■…土師器(古代) ▲…布痕土器 ★…石器

第22図 小穴群平面実測図及び出土遺物



第 23 図 時期不明の遺構に伴う遺物

第7節 包含層出土遺物

1 概要

遺構に伴わないⅡ層出土遺物を、包含層出土遺物として図化掲載する。

2 遺物

(1) 土器・陶磁器等 (49～115)

国産陶器 (49)

49は古瀬戸の瓶子胴部である。外面に画花文の後、鉄釉を施す。内面には回転ナデが認められる。14世紀頃と考えられる。

輸入磁器類 (50～56)

50～55は白磁で、50～53は碗、54・55は皿である。50・51は口縁部である。50は推定口径13.0cm、緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁は僅かに肥厚する。内外面に釉を施し、内面口縁付近には釉だまりが見られる。51は推定口径11.0cm、直線的に立ち上がり、口縁部を丸く作る。内外面に釉を施し、僅かに気泡が見られる。52は底部から胴部で、推定底径4.8cm、内面に櫛描文を施し、底部外面は露胎である。53は底部で、推定底径5.9cm、内面に釉を施し、目痕に砂の付着が認められる。外面は露胎で高台は低い。54・55は底部から胴部である。内外面に釉を施す。54は底部内面に円状の削り出しが認められる。外面は露胎で、推定底径3.2cm。55は推定底径4.2cm、内面に線刻を施す。56は青磁皿の底部から胴部で、推定底径3.6cm。内面に片切堀を施す。

須恵器 (57～65)

57は東播系須恵器のこね鉢である。直線的に立ち上がり、内外面に回転ナデを施す。58～64は甕の胴部で、58・59は外面に格子目タタキを施し、内面に当て具痕が見られる。60は外面に平行タタキ、内面に斜方向の当て具痕。61は外面に平行タタキ、内面に当て具痕後ナデ調整が認められる。62は外面にタタキ後に横方向のカキメが認められる。63は外面に格子目タタキ、内面に当て具痕が見られる。64は外面に格子目タタキ、内面に車輪文の当て具痕が残る。65は提瓶の胴部である。外面に工具によるナデ、内面に回転ナデを施す。

中世土師器 (66)

66は皿の口縁部から底部である。体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。推定底径6.6cmのへら切り底で、内外面に回転ナデを施す。

布痕土器 (67)

67は鉢の口縁部から胴部である。やや内湾しながら立ち上がり、外面にナデ、口唇部にケズリ後ナデを施す。内面に粗い布目圧痕が認められる。

古代土師器 (68 ~ 73)

68・69 は甕である。68 は口縁部から胴部であり、推定口径 15.8cm。頸部でく字形に屈曲し、外反する口縁の端部は丸く作る。内外面に横ナデ調整を施す。69 は口縁部である。頸部で強く外反し、口縁端部はやや肥厚し丸く作る。外面に横方向のナデ、内面に板状工具による横方向のナデを施す。70 ~ 73 は坏底部である。70 は高台を有し、約 1 / 3 が残存する。内外面に回転ナデを施す。71 は比較的高い高台の端部は丸く仕上げ、約 1 / 7 が残存する。推定底径 8.6cm で、内外面とも風化により調整不明である。72 は推定底径 6.4cm のヘラ切り底で、内外面とも風化が著しく調整不明である。73 は推定底径 6.9cm のヘラ切り底で、内外面に回転ナデを施す。内面は一部黒変し、ススが付着する。

古墳時代の土師器 (74 ~ 79)

74・75 は甕である。74 は胴部で、緩やかに内湾する。外面にタタキ、内面にナデを施す。外面下部にススが付着する。75 は底部である。外面に縦方向の工具ナデを施す。約 1 / 4 が残存し、推定底径は 5.2cm を測る。76・77 は鉢の口縁部から胴部である。76 はやや内湾しながら立ち上がり、内外面にナデ調整を施す。口縁端部は外に僅かに肥厚し、口唇部は平らに仕上げる。推定口径は 15.3cm を測る。77 は頸部でく字形に屈曲し、外傾する口縁と肩部から緩やかに内湾する胴部となる。外面は口縁から頸部に斜めのハケメ、胴部に横ナデ、内面に斜めのハケメを施す。78・79 は高坏である。78 は坏底部から脚部で、平坦な坏底部から口縁に立ち上がる部分で、粘土の接合面が外れている。内外面にナデを施し、黒斑が認められる。脚部は直線的に伸び、脚下部で強く屈曲して開く。外面に横ナデ、内面に横方向のケズリを施す。79 は坏底部から脚上部である。坏部は緩やかに内湾し、内面にナデを施す。脚部は緩やかに外反しスカート状に開く。内面にナデ調整を施し、指頭痕が残る。

縄文土器 (80 ~ 114)

縄文土器については、文様や調整の特徴から以下に示すように分類した。なお、第3節～6節の遺構出土の遺物で記載した縄文土器についても併せて分類する。なおⅧ類については、器壁や外面調整ではⅠ類に属する可能性もある。

Ⅰ類：無文系 (13、19 ~ 21、80 ~ 83)

80 ~ 83 は深鉢である。80-1 は口縁部で、直線的に立ち上がり、口縁は丸く作る。内外面の横方向のナデを施し、黒斑が認められる。外面にススが付着する。80-2 は胴部で、緩やかに内湾し立ち上がる。外面に斜方向の粗いナデ、内面にナデを施す。外面にススが多量に付着する。胎土や色調、調整の特徴から 80-1・80-2 は同一個体であると考えられる。81 は頸部である。緩やかに外反し、内外面に横ナデを施す。82 は口縁から胴部である。直線的な口縁は、端部のみ僅かに外反する。外面に横、斜方向のナデ、内面に横方向のナデを施し、砂粒の移動が認められる。外面にススが付着する。83 は口縁部である。直線的に立ち上がり、口唇部に横ナデを施す。外面に粗いナデを施し、ススが付着する。内面は口縁付近に横方向のナデ、その下部に横、斜方向のナデを施す。

Ⅱ類：突帯文系（13、23～24、40、45、84～94）

84～88は深鉢口縁部で、断面三角形の突帯を持つ。84は緩やかに外反し、口縁は丸く作る。外面口縁上部に貼付突帯、下部に斜方向の工具痕が残る。内外面にナデを施し、黒斑が認められる。85は直線的に立ち上がり頸部で屈曲し外反する。外面頸部に貼付突帯、内外面に横ナデを施す。外面にススが付着し、黒変が認められる。86～88は緩やかに外反し、口縁部を丸く作る。外面口縁下部に貼付突帯を作り、内外面に横ナデを施す。89は浅鉢口縁部で、直線的に立ち上がり、外面口縁付近に断面台形の貼付突帯を作る。外面突帯下部に横方向のミガキ、内面に横ナデを施す。90は深鉢口縁部で、緩やかに外反し、口縁部を丸く作る。外面口縁下部に断面台形の貼付突帯を作り、内外面に横ナデを施す。

Ⅱ類-②：孔列文を伴う（91～94）

91～94は深鉢である。91・92は口縁部で、突帯を持つ。91は直線的に立ち上がり、口縁は丸く作る。内外面に工具による横ナデ、外面のミミズ腫れ状突帯上部に外からの未貫通の孔列文を施す。92はやや外反しながら立ち上がり、口縁は丸く作る。内外面にナデ調整を施し、ススが付着する。外面の断面三角形の貼付突帯下部に外からの孔列文を施す。93・94は胴部である。口縁部が欠損しているため突帯の有無が確認できないが、Ⅱ類に分類した。93は直線的な胴、上部に外からの未貫通の刺突文を施す。内外面に横方向のナデを施し、ススが付着する。94はやや内湾しながら立ち上がり、上部に外からの未貫通の刺突文を施す。外面に横方向のミガキ、内面の横方向のナデを施す。

Ⅲ類：貝殻文系（95～101）

Ⅲ類-①：貝殻条痕文（95～99）

95～99は深鉢である。95は口縁部から胴部で、直線的に立ち上がり口縁を丸く作る。外面に横ナデが施され、下部に一部斜方向の貝殻条痕文が認められる。内面に貝殻条痕を施す。96・97は口縁部である。96は直線的に立ち上がり丸く作る。内外面に横方向の貝殻条痕文、内面口縁付近に一部斜方向の貝殻条痕文を施す。外面はススが多量に付着する。97は僅かに外反し丸く作る。内外面に横、斜方向の貝殻条痕を施す。98・99は胴部である。98は外面に縦方向の貝殻条痕を施し、上部にススが付着する。内面は横ナデを施し、粗い指頭痕が残る。99は僅かに外反する。内面に横方向の貝殻条痕を施す。外面に横、斜方向の工具痕が残る。

Ⅲ類-②：貝殻刺突文（100・101）

100・101は深鉢である。100は頸部である。外面上部に横方向の貝殻腹縁刺突文が巡る。内外面にナデを施す。101は胴部である。外面上部に斜方向の貝殻腹縁刺突文、内外面に横ナデを施す。

Ⅳ類：擬縄文系（102）

102は浅鉢胴部で、緩やかに内湾しながら立ち上がる。外面上部に二本の凹線が巡り、間に斜方向の刻み目が認められる。内外面に横ナデを施す。

Ⅴ類：沈線文系（25、48、103）

103は浅鉢口縁部で、水平に近く大きく開く。上面に斜方向の連続する沈線文と刺突文を二重に施す。口唇部にナデ、外面に粗いナデを施す。

Ⅵ類：磨研土器系（26～29、38、41、46、104～111）

104は深鉢口縁部である。やや内傾しながら緩やかに外反し、口唇部は横ナデを施す。口縁外面に貼付突帯を持ち、その上部に横ナデ、下部に横、斜方向のミガキ、内面に横方向のミガキを施す。色調は内外面ともに黒褐色を呈する。105～111は浅鉢である。105・106は口縁部から胴部である。105は推定口径31.6cmを測る。肩部が強く張り、頸部で強く屈曲し緩やかに外反し口縁を作る。内外面にミガキを施し、外面は灰黄褐色で風化が著しい。106は肩部が丸く膨らみ、頸部で強く外反し口縁を短く作る。口縁内外面に沈線が一条ずつ巡り、口唇部にはススが付着する。外面は丁寧なミガキ、内面は横方向のミガキを施す。外面はにぶい褐色を呈する。107・108は口縁部である。107はリボン状突起で、内外面にミガキ、内面下部に一部ナデを施す。突起部は浅黄橙色で、口縁部は褐灰色を呈する。108は口縁が僅かに肥厚する。内外面に横方向の丁寧なミガキを施す。外面は灰褐色を呈する。109は頸部から胴部である。頸部でく字に強く屈曲し口縁へ続き、肩部は強く張る。外面はにぶい黄褐色、内面は黒褐色を呈する。110・111は胴部である。110は肩部からく字に屈曲し内湾する。外面に横方向のミガキを施し、内面は縦方向の工具痕が残る。内外面にススが僅かに残る。外面はにぶい黄褐色、にぶい橙色、内面はにぶい褐色を呈する。111は直線的に立ち上がる。内外面に横方向のミガキを施し、灰黄褐色を呈する。

Ⅶ類：磨研土器系（薄手で小型器種）（30～32、112）

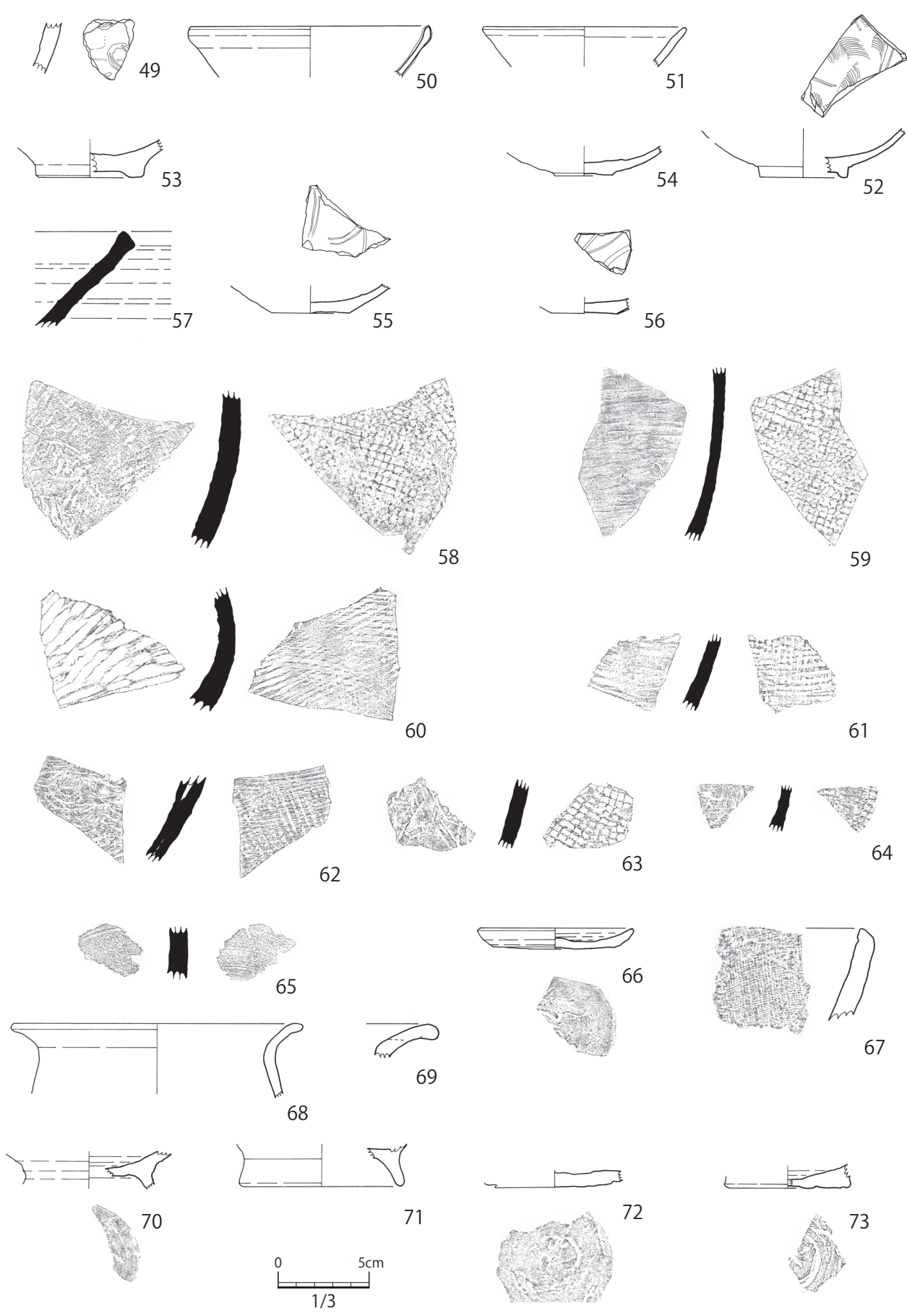
112は浅鉢の頸部から胴部である。緩やかに内湾し、頸部でく字に屈曲する。外面は頸部に横方向のミガキ、胴部に斜方向のミガキ、内面に横方向のミガキを施し、にぶい黄色を呈する。

Ⅷ類：底部（15、113～114）

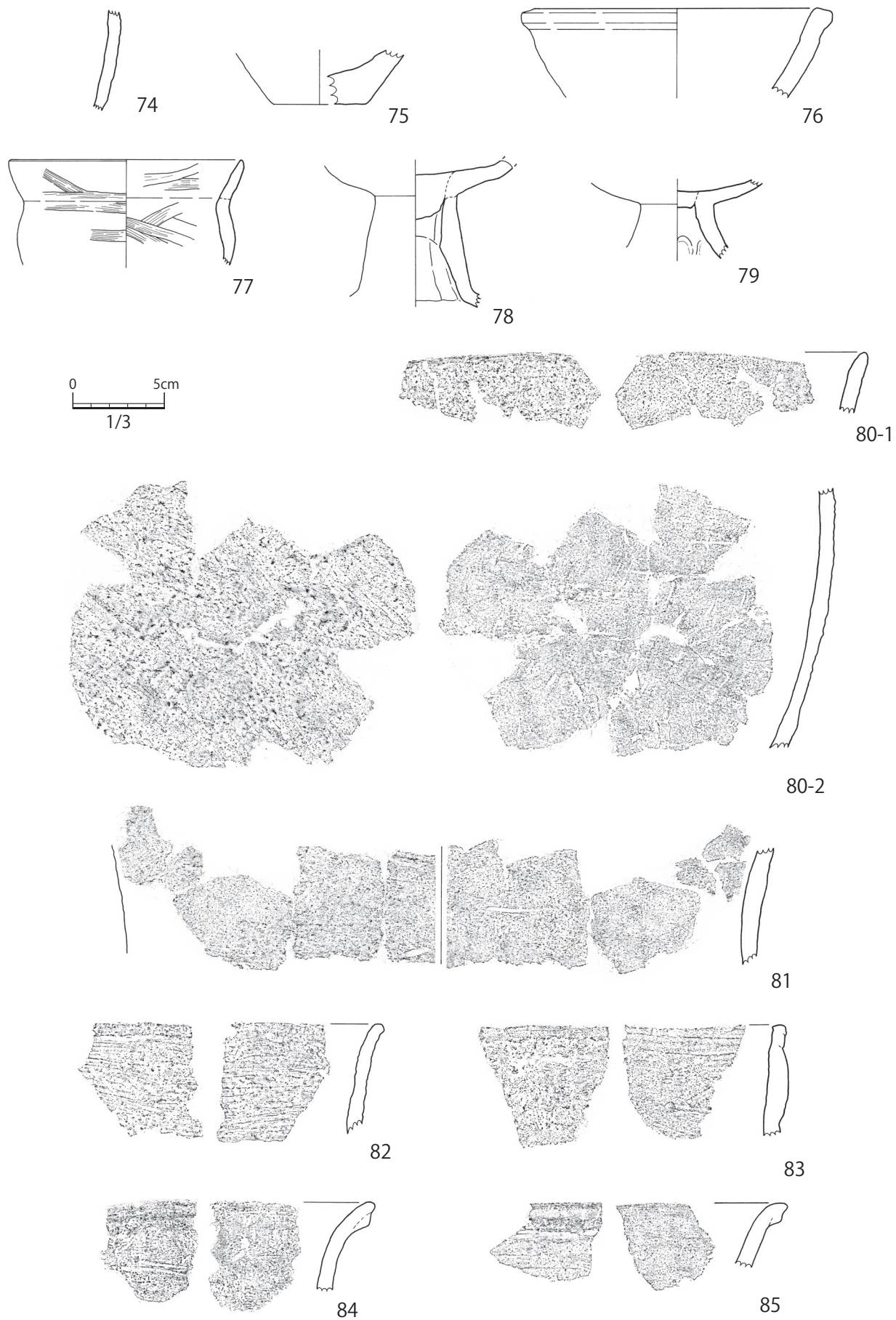
113・114は深鉢底部である。113は約2/5が残存し、推定底径9.8cm。底外面に粗いナデ、内外側面は横ナデ後指頭後が残る。114は約1/4が残存し、推定底径14.0cm。内面に斜方向のナデ、強い指ナデを施す。外面は風化が著しく調整不明であるが、底外面に網代の圧痕が残る。

土製品（115）

115は土器片錘である。土器片の周囲を粗い打ち欠きにて略長方形に整形し、長軸両端に切り目を施している。最大長5.75cm、最大幅7.25cm、最大厚1.3cm、重量50.5gを図る。正面に工具による横、斜方向のナデが施され、炭化物が付着する。裏面はナデが施され、風化が見られる。



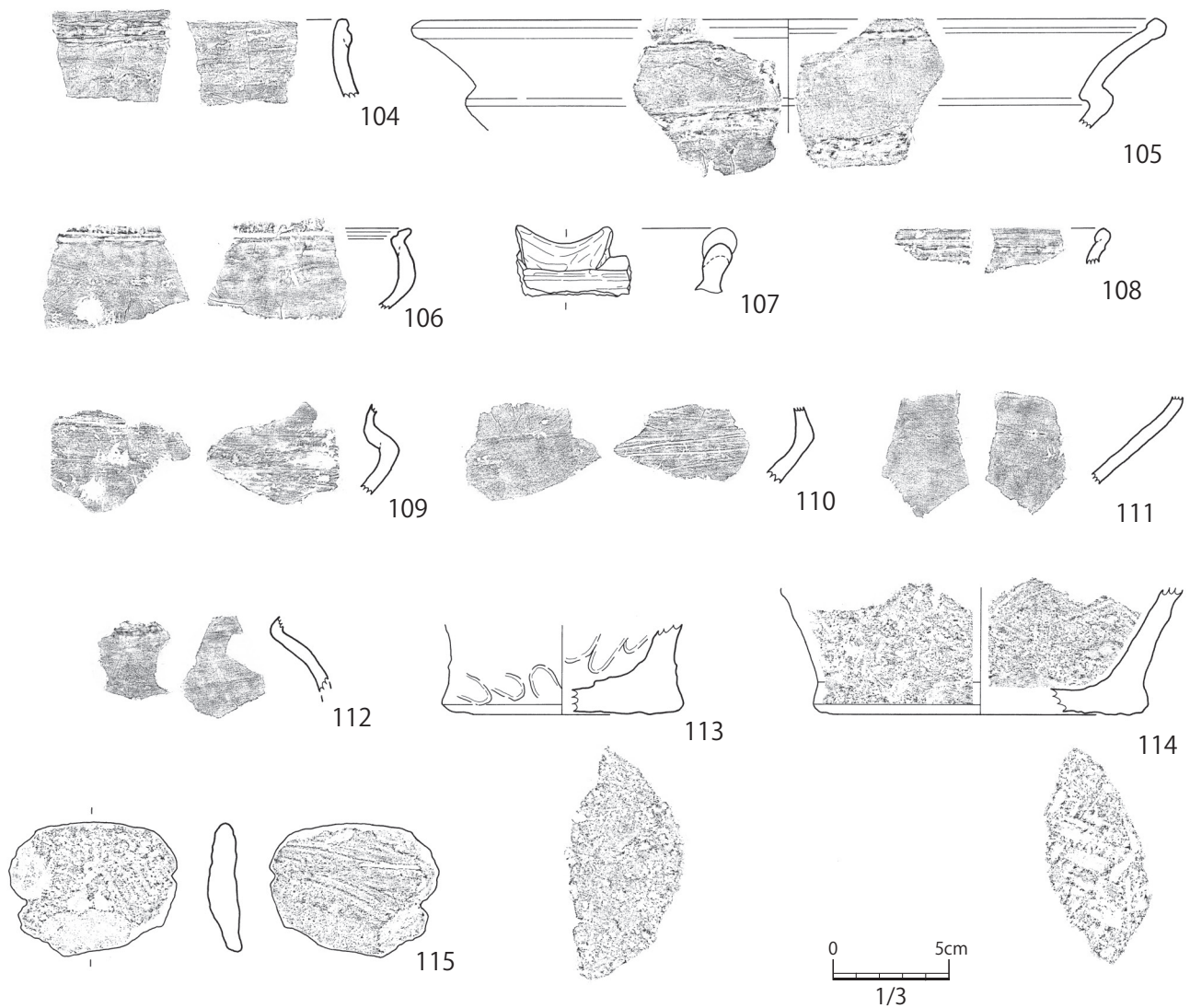
第 24 图 包含層出土遺物①



第 25 図 包含層出土遺物②



第 26 图 包含層出土遺物③



第 27 図 包含層出土遺物④

(2) 石器 (116 ~ 156)

二次加工剥片 (116 ~ 122)

116 ~ 118 は頁岩源ホルンフェルス製である。116 は左右側縁に両面から剥離を施し刃部としている。117 は右側縁に両面から、左側縁に正面から剥離調整を施す。118 は下縁を刃部とし、両面から剥離調整を施す。119 は頁岩製で、下縁と右側縁に両面から剥離調整を施す。形状から楔形石器として使用した可能性がある。120・121 は砂岩源ホルンフェルス製である。120 は右側縁を両面から加工し持ち手を作り、左側縁の自然剥離面を刃部として使用したと考えられる。121 は薄い剥片の周縁を両面から剥離調整をしている。122 は砂岩製で、正面の剥離面下縁に加工を施し、刃部を作り出している。

打製石斧 (123 ~ 136)

123・124 は砂岩源ホルンフェルス製である。肉厚で、樹木伐採に用いられたと考えられる。123 は周縁部に剥離による整形を施す。基部上端は一部欠損しており、刃部に向けてやや広がる形を呈する。3.8cm の厚さを測る。124 は一部に剥離面が残るが、周縁部に細かい敲打による整形を施す。刃部を大きく欠損し、裏面に大きく磨面が認められる。3.0cm の厚さを測る。

125 は泥岩源ホルンフェルス製、126・127 は頁岩源ホルンフェルス製である。周縁部に剥離調整を両面から施す。主として伐採樹木の加工に用いられた可能性が高い。

128～136は扁平で、主に土掘具として使用されたと考えられる。128は砂岩源ホルンフェルス製、129は頁岩製である。完形で、長軸上の下側縁に両面から加工を施し、刃部を作る。基部から刃部にかけて撥型に開く形状である。130～132は基部である。130は頁岩製で左右に剥離調整を施し、裏面に磨面が認められる。131は頁岩源ホルンフェルス製、132は砂岩源ホルンフェルス製で、左右側面に剥離調整を施す。133～136は刃部である。周縁部に両面からの剥離調整を施す。133・134は頁岩源ホルンフェルス製、135は頁岩製、136は砂岩源ホルンフェルス製である。133は撥型、134～136は短冊形を呈する。

礫器 (137)

137は泥岩源ホルンフェルス製である。下部の剥離面に加工を施し、刃部を形成している。

石包丁 (138)

138は泥岩源ホルンフェルス製である。正面に自然面、裏面に主要剥離面を残し、背面及び下縁に細かい剥離調整を施した後、下縁のみ研磨を行い刃部とする。両側縁を打ち抜き抉りとする。

石錘 (139～148)

139～141は砂岩製、142～144は泥岩源ホルンフェルス製、145・146は頁岩製、147は泥岩源ホルンフェルス製、148は頁岩製である。扁平な円礫を素材とし、長軸の両端部を打ち欠いた形状である。大きいものは139で重量157.6g、小さいものは148で重量9.2gで親指大である。

敲石 (149～151)

149は斑状花崗岩製で、上下両端部と右側縁に凹凸の敲打痕が確認できる。重量は557.7gを測る。150・151は砂岩製である。150は重量519.5gで、正面中央と左側縁下部、右側縁部に敲打痕が認められ、上部に欠損が見られる。151は重量265.0gで、細長い礫の上下両端部に敲打痕が認められる。

磨石 (152～154)

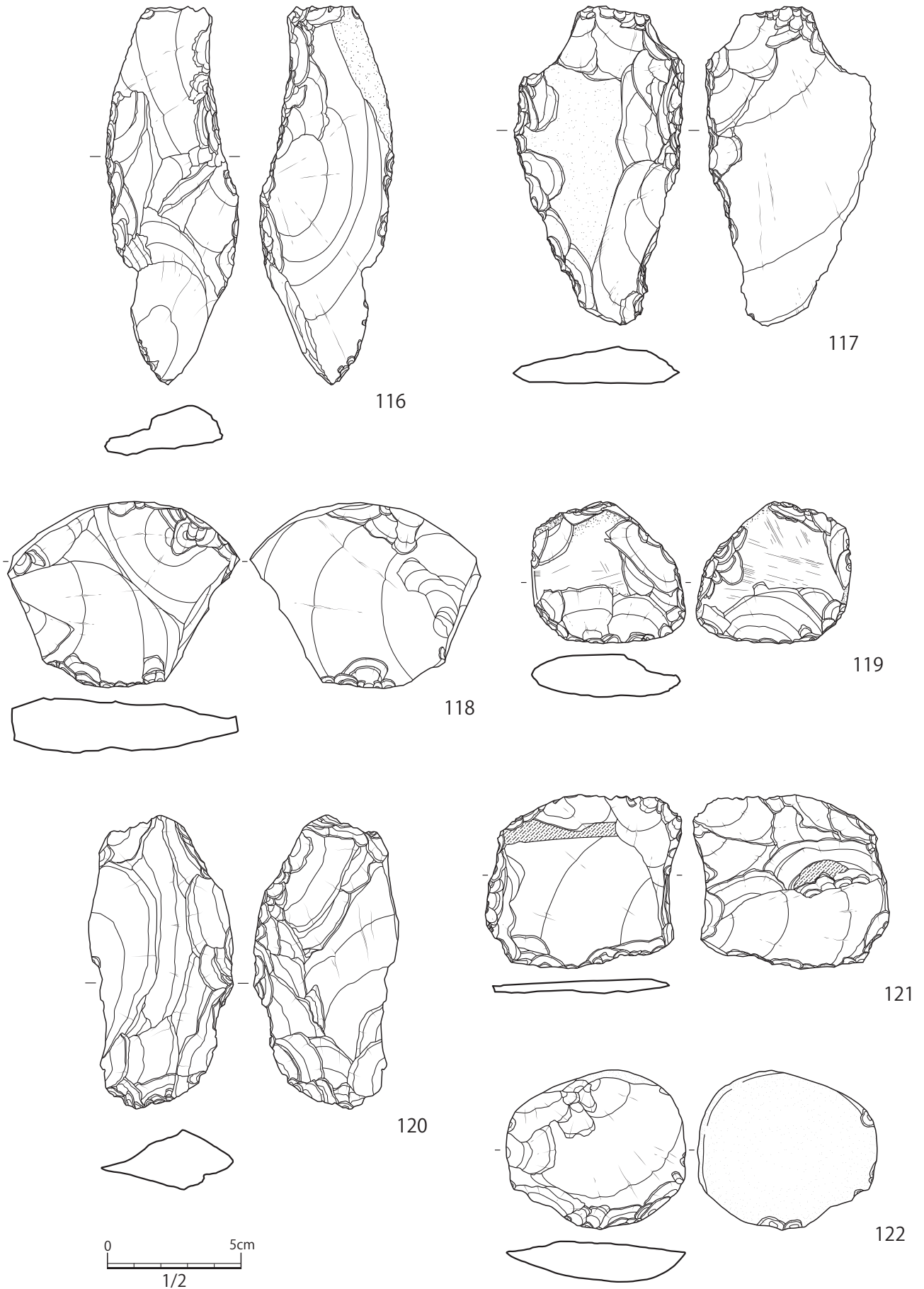
152・153は砂岩製の敲打痕を併せ持つ磨石である。152は重量968gを測り、正面と裏面に磨面が認められ、側面周縁を敲打痕が巡る。153は重量395.3gで、正面に磨面、右側縁に敲打痕が見られる。154は尾鈴山酸性岩類の溶結凝灰岩製で、側縁を含めて全体に磨面が認められる。大きく欠損し、重量は90gを測る。

石皿 (155)

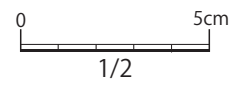
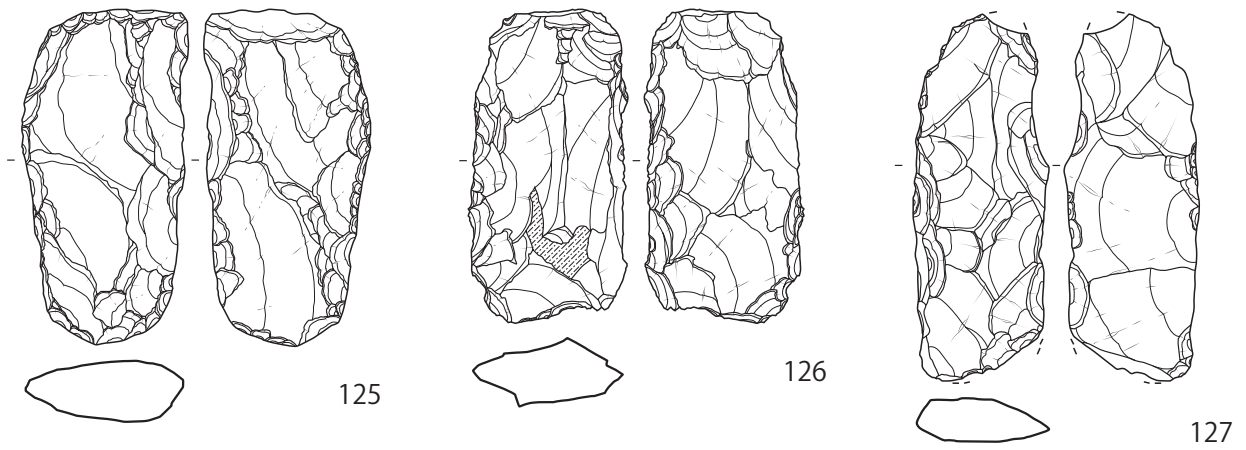
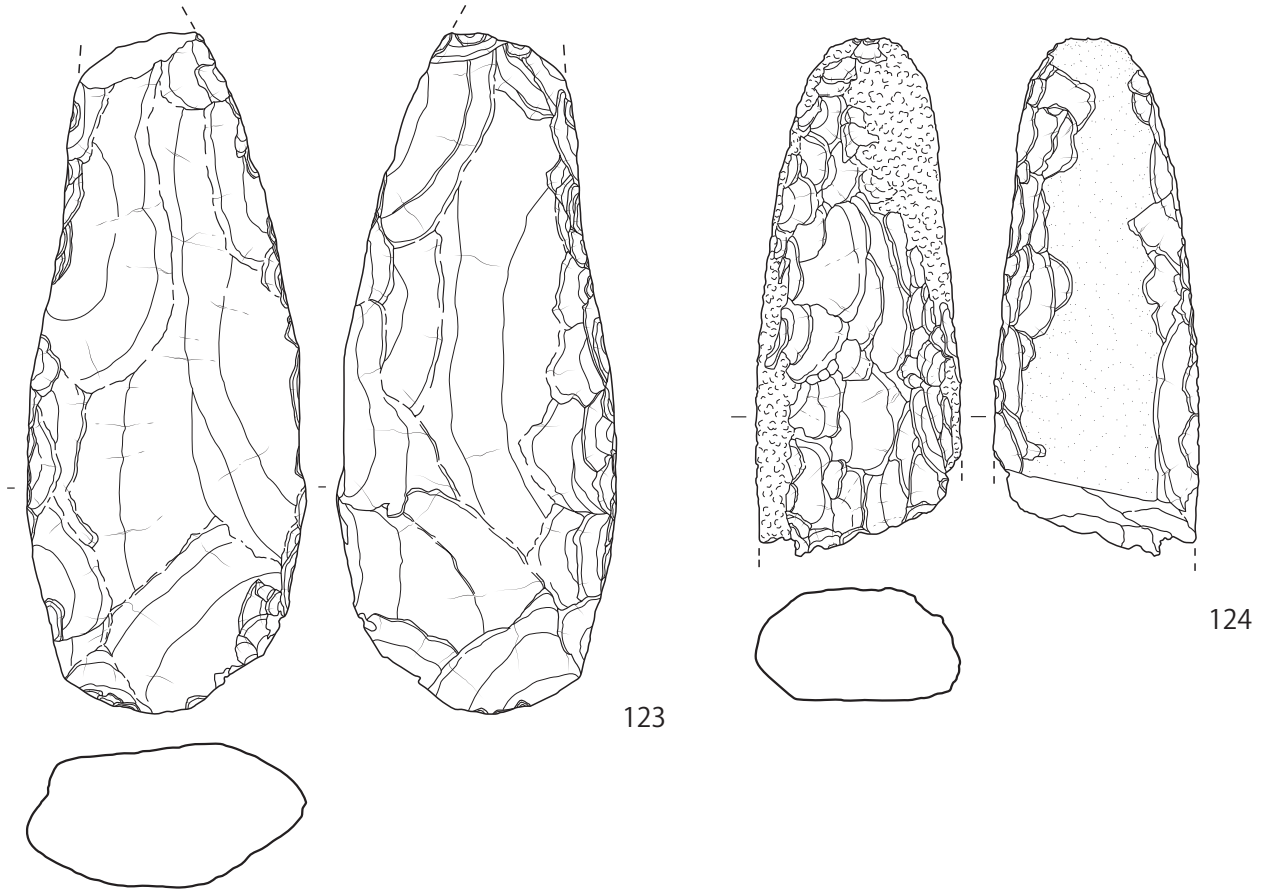
155は砂岩製で、最大長26.1cm、最大幅が38.6cm、重量13.8kgを測る。正面と裏面に広い平坦な面を持ち、正面中央部に磨痕が認められる。

砥石 (156)

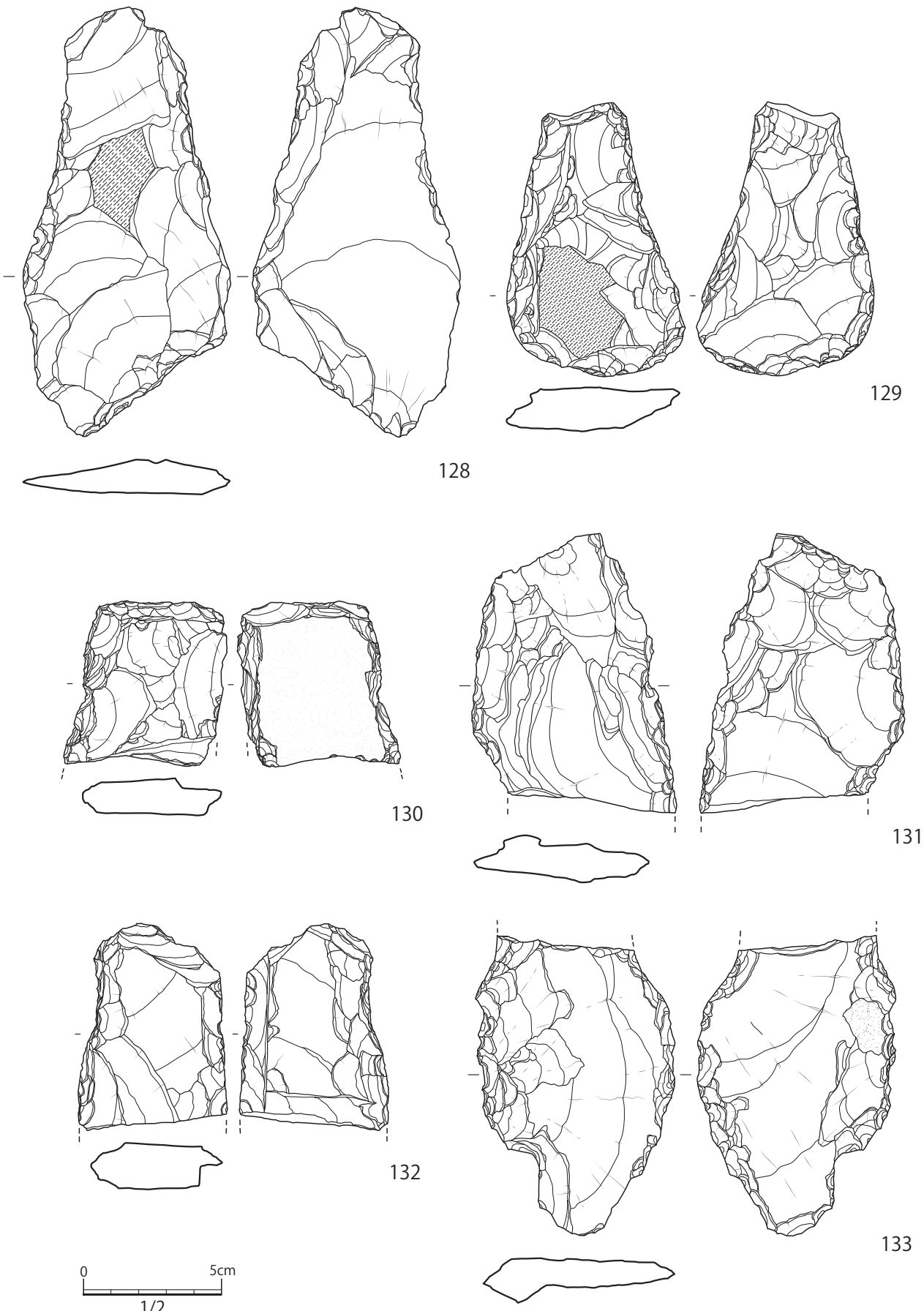
156は頁岩製である。右側縁が大きく欠損しており、正面中央に磨痕が確認できる。裏面は中央から広い範囲で敲打痕が認められることから、砥石とは別の用途でも使用していた可能性も考えられる。



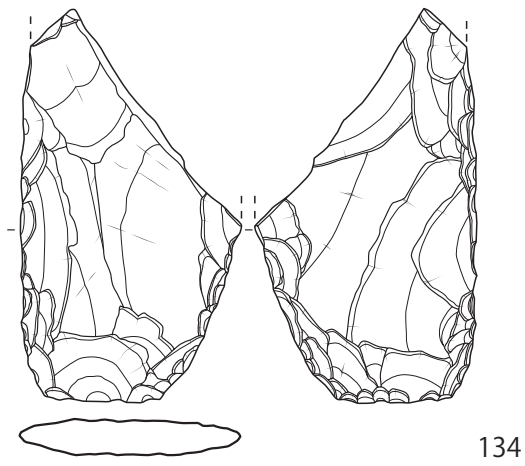
第 28 图 包含層出土遺物⑤



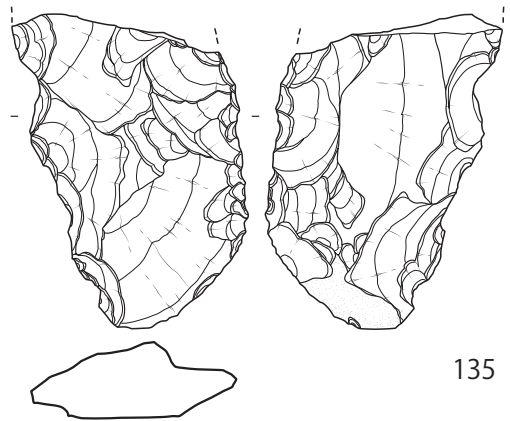
第 29 図 包含層出土遺物⑥



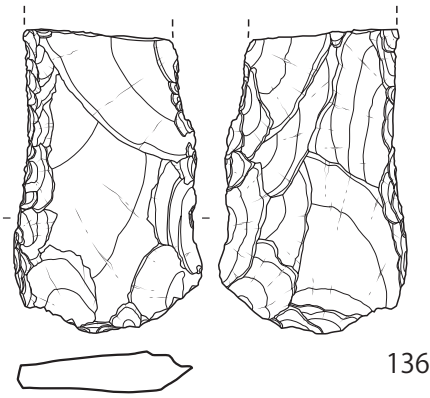
第 30 图 包含層出土遺物⑦



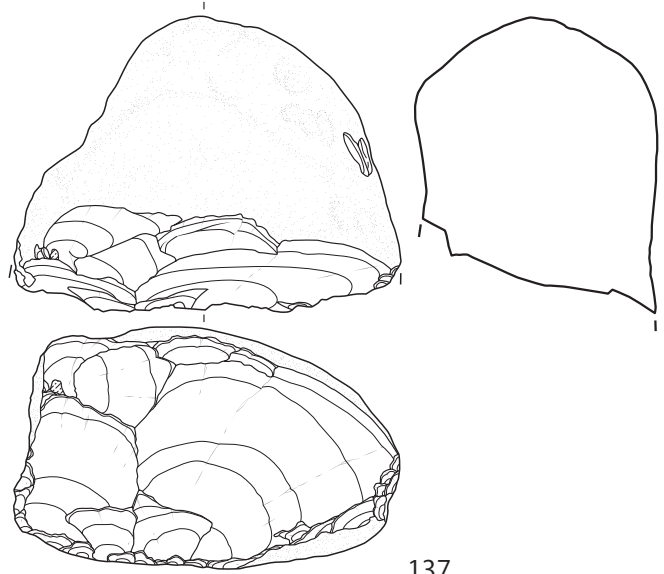
134



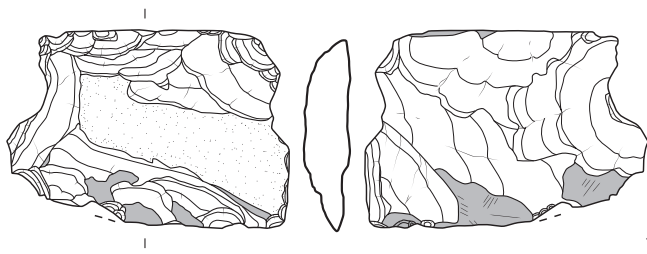
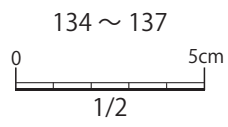
135



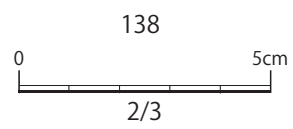
136



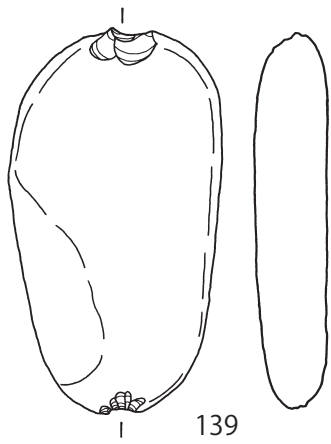
137



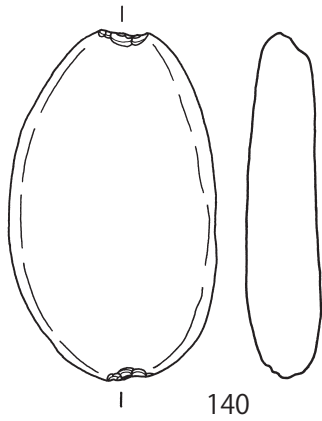
138



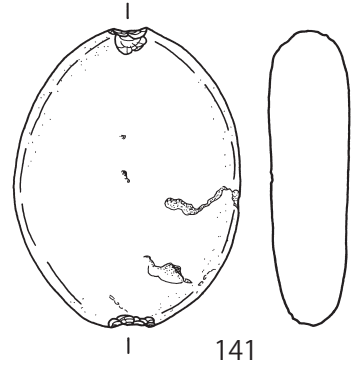
第 31 図 包含層出土遺物⑧



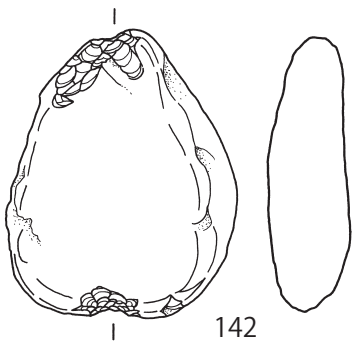
139



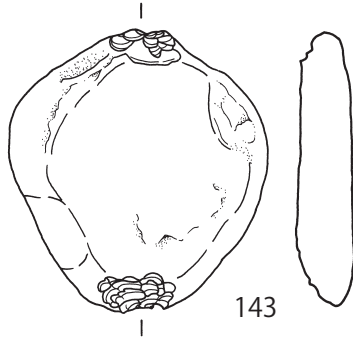
140



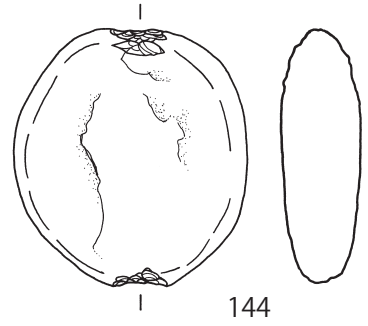
141



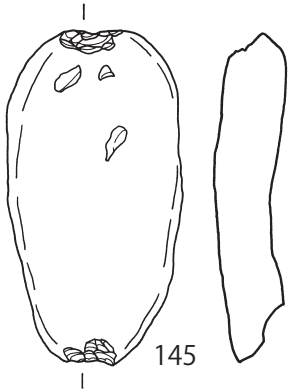
142



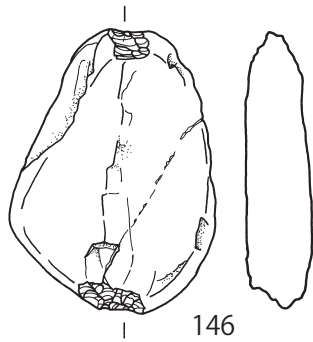
143



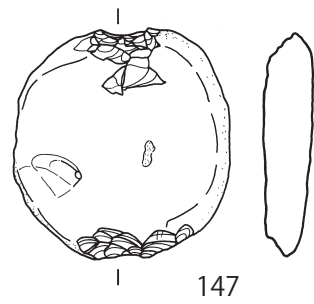
144



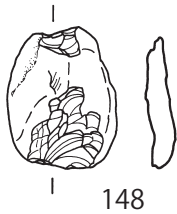
145



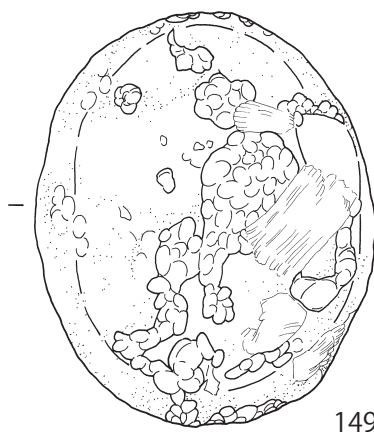
146



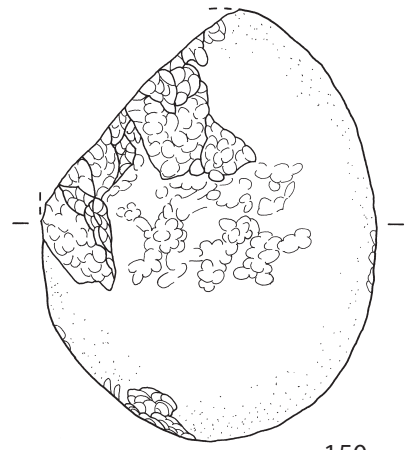
147



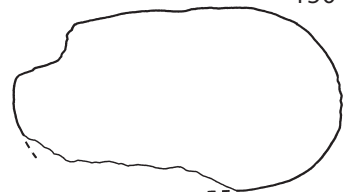
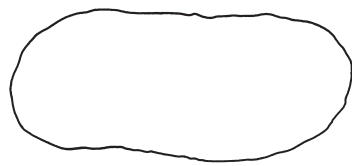
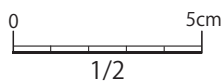
148



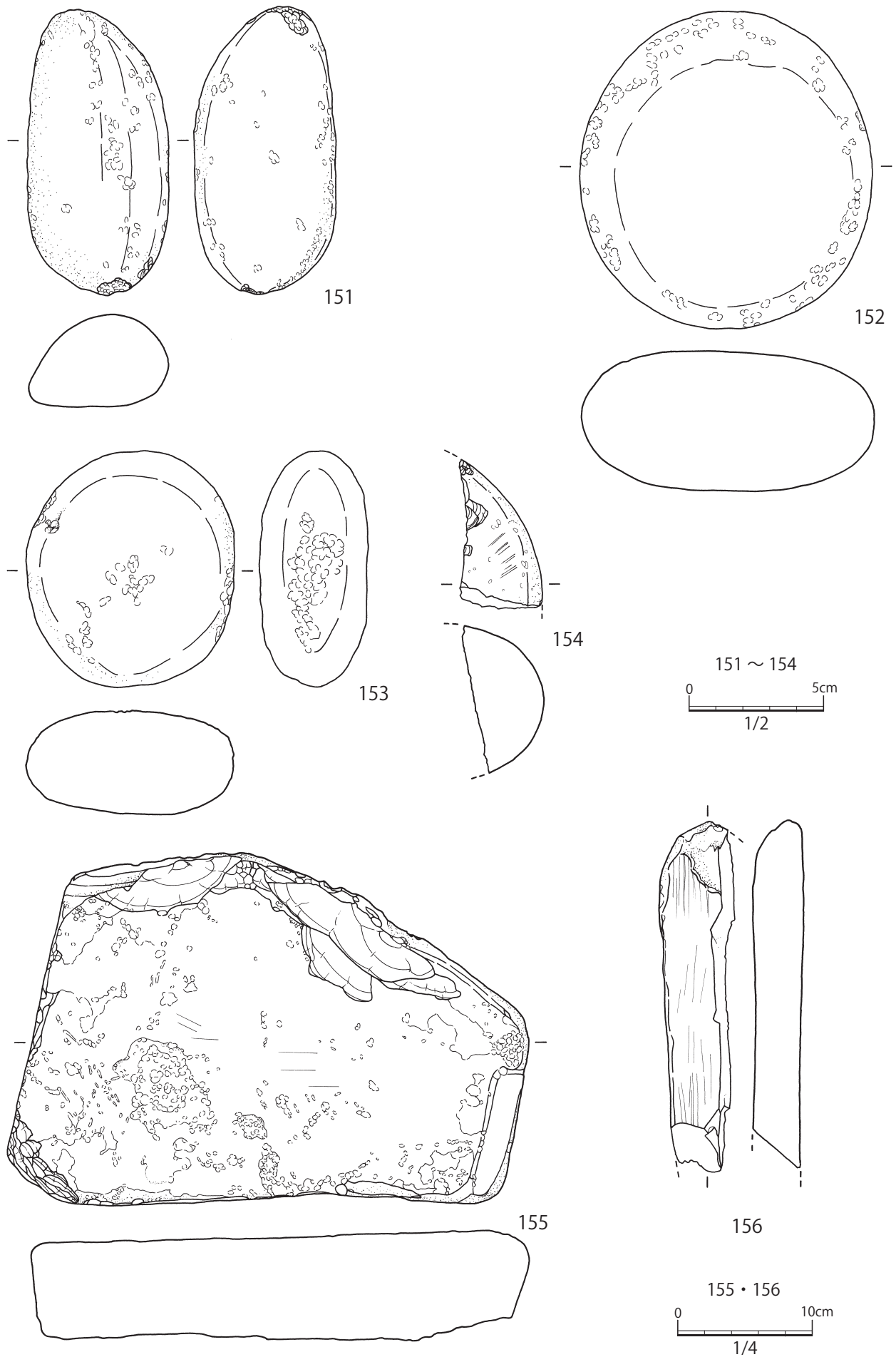
149



150



第 32 図 包含層出土遺物⑨



第 33 図 包含層出土遺物⑩

第1表 土器観察表①

遺物番号	種別	器種	部位	出土位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	壺	口縁部 ~底部	SD1	(9.4)	7.6	7.5	横ナデ、指頭痕 ヘラ切り後工具ナデ	横ナデ 指ナデ	灰黄褐 10YR6/2	橙 7.5YR7/6	3mm以下の白色粒少量 3mm以下の赤色粒少量 微細な光沢粒わずか	口縁部から底部 にスス付着 頸部から胴部 にかけて厚い
2	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	16.9	7.5	6.9	回転ナデ後ミガキ 高台放射状調整痕	回転ナデ後ミガキ ミガキ後指頭痕	黒 2.5YR2/1	黒 2.5YR2/1	微細な光沢粒わずか	黒色土器B類
3	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	11.45	6.75	5.0	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	微細な無色透明光沢粒 1mm以下の褐色粒、 黒色光沢粒わずか 3mm以下の赤褐色粒わずか	外面に1mm以下 の黒色物付着
4	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	12.85	6.8	4.5	回転ナデ、横ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm以下の無色透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒、 褐色粒わずか	内外面広範囲に 黒斑あり
5	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	10.75	5.05	3.25	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	3mm以下の赤褐色粒わずか 微細な無色透明光沢粒わずか	
6	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	10.5	6.75	2.65	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	4mm以下の赤褐色粒 微細な黒色粒 微細な透明光沢粒	
7	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	10.75	6.55	3.2	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	1mm以下の無色透明光沢粒少量 0.5mm以下の褐色粒少量 微細な黒色光沢粒わずか	
8	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	10.5	6.3	3.0	回転ナデ、ヘラ切り 一部黒変	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	微細な透明粒 微細な黒色光沢粒わずか	
9	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	10.0	6.05	2.4	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ スス付着	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	2mm以下の赤褐色粒わずか 2mm以下の灰色粒わずか 1mm以下の透明光沢粒	
10	土師器	坏	口縁部 ~底部	SD1	10.4	6.4	2.6	横ナデ、回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	微細な光沢粒わずか 1mm以下の赤褐色粒わずか	
12	土師器	壺	口縁部 ~胴部	SA1	(14.8)	-	-	横ナデ 工具ナデ後指頭痕 凹凸あり、粗い	縦、横、斜ナデ 指頭痕	明黄褐 10YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4 橙 5YR6/6	3mm以下の赤褐色粒 微細な透明粒わずか	口唇部欠損 口縁部約1/8 胴部約1/2残存
13	縄文土器	深鉢	口縁部	SA1	-	-	-	貼付突帯文 風化のため調整不明	横ナデ 黒斑あり	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	4mm以下の褐色粒 2mm以下の灰色粒 2mm以下の白色粒 微細な無色透明光沢粒わずか	
14	縄文土器	浅鉢	口縁部	SA1	-	-	-	ミガキ 風化	ミガキ 風化	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	微細な無色透明光沢粒 微細な黒色光沢粒わずか	実測線外に 細沈線
15	縄文土器	深鉢	底部	SA1	-	-	-	ナデ 一部斜方向工具痕	ナデ スス多量付着	橙 5YR6/6 灰黄褐 10YR5/2	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm以下の黒色柱状光沢粒少量 微細な無色透明光沢粒少量 3mm以下の白色粒わずか	
17	土師器	小型壺	口縁部	SC3	-	-	-	横ナデ	横ナデ 一部斜ナデ	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4 橙 7.5YR7/6	3mm以下の褐色粒 3mm以下の灰白色粒わずか	
19	縄文土器	深鉢	口縁部 ~胴部	SC5	(37.4)	-	-	工具横ナデ 工具斜ナデ	工具横ナデ ミガキのような光沢 炭化物付着	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	3mm以下の褐色粒 3mm以下の白色粒、灰色粒少量 1mm以下の曇母わずか	ヒレ状突起 約1/7残存 外面黒斑あり スス付着
20	縄文土器	深鉢	口縁部	SC5	-	-	-	爪状工具横方向刺突 斜ナデ	削り状横ナデ 斜ナデ	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	3mm以下の赤褐色粒わずか 2mm以下の白色粒 微細な透明光沢粒	
21	縄文土器	深鉢	胴部	SC5	-	-	-	工具斜粗いナデ スス少量付着	横・斜ナデ	浅黄橙 10YR8/3	黄灰 2.5YR4/1 黄灰 2.5YR6/1	3mm以下の灰白色粒 3mm以下の褐色粒わずか 1mm以下の無色透明光沢粒	
22	縄文土器	深鉢	口縁部 ~胴部	SC5	(38.0)	-	-	粗い横ナデ、黒斑あり 工具横、斜ナデ 上部にスス付着	工具横ナデ 一部斜ナデ 一部ミガキ炭化物付着	褐灰 7.5YR5/1	にぶい黄橙 10YR6/3	4mm以下の褐色粒多量 3mm以下の白色粒少量 1mm以下の曇母わずか	約1/7残存
23	縄文土器	深鉢	口縁部	SC5	-	-	-	横方向の貼付突帯 風化による剝離	横ナデ	橙 7.5YR/6/6 灰白 2.5YR7/1	橙 7.5YR/6/6 黒 2.5YR2/1	3mm以下の灰色粒多量 2mm以下の白色粒多量 2mm以下の黒色光沢粒	
24	縄文土器	深鉢	口縁部	SC5	-	-	-	横方向の条痕 貼付突帯	横方向の条痕 一部黒斑	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR6/1	2mm以下の赤褐色粒 2mm以下の白色粒 微細な透明光沢粒わずか	
25	縄文土器	浅鉢	口縁部	SC5	-	-	-	ナデ	刺突文 斜方向の細沈線文	にぶい黄褐 10YR7/3	にぶい橙 5YR6/4	1mm以下の灰白色粒少量	内面黒斑
26	縄文土器	浅鉢	口縁部 ~胴部	SC5	(44.0cm)	-	-	ミガキ	ミガキ	灰褐 7.5YR5/2	橙 5YR6/6 灰褐色 7.5YR5/2	3mm以下の赤褐色粒少量 微細な白色粒少量 微細な曇母多量	頸部 約1/8残存
27	縄文土器	浅鉢	口縁部 ~胴部	SC5	(32.8cm)	-	-	穿孔	穿孔 沈線	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	微細な曇母を含む	約1/10残存 穿孔あり
28	縄文土器	浅鉢	口縁部 ~胴部	SC5	-	-	-	斜方向のヘラミガキ スス付着 黒斑あり	横方向のヘラミガキ 斜方向のヘラミガキ 黒斑あり	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4	1.5mm以下の灰白色粒わずか 微細な無色透明光沢粒	
29	縄文土器	浅鉢	口縁部	SC5	-	-	-	横方向の沈線文 横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	微細な無色透明光沢粒多量 0.5mm以下の白色粒わずか	内外面に 黒色付着物
30	縄文土器	浅鉢	口縁部 ~胴部	SC5	(6.2)	(7.2)	-	横ナデ、沈線 縦ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄 2.5YR7/2	2mm以下の褐色粒わずか	約1/6残存 リボン状突起
31	縄文土器	浅鉢	口縁部 ~胴部	SC5	-	-	-	沈線、丁寧なナデ 一部黒変	丁寧なナデ 一部黒変	にぶい黄橙 10YR7/2	黒褐 10YR3/2	微細な白色粒少量	
32	縄文土器	浅鉢	口縁部	SC5	-	-	-	ナデ、沈線 一部黒変	ナデ、沈線 黒変	浅黄 2.5YR7/3	黒褐 2.5YR3/2	微細な光沢粒 微細な赤色粒少量	
38	縄文土器	浅鉢	口縁部	SC2	-	-	-	横方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	褐灰 10YR4/1 にぶい赤褐 5YR5/4	灰黄褐 10YR4/2 橙 5YR6/6	0.5mm以下の灰白色粒、褐色粒 わずか	
40	縄文土器	深鉢	口縁部	SC6	-	-	-	貼付突帯 工具横ナデ 黒斑あり	横方向のナデ 斜方向のナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 2.5YR8/1	3mm以下の褐色粒 2mm以下の白色粒 1mm以下の曇母わずか	
41	縄文土器	浅鉢	口縁部	SC6	-	-	-	横方向のヘラミガキ 沈線文	沈線文	褐灰 7.5YR/5.1	褐灰 7.5YR/5.1	きめ細かい微細な透明光沢粒少量	
43	須恵器	こね鉢	口縁部 ~胴部	SC7	-	-	-	回転ナデ 自然釉	回転ナデ	灰褐 10YR6/1	灰褐 10YR6/1	1mm以下の灰色粒、灰白色粒少量 5mm以下の灰色粒わずか 2mm以下の赤褐色粒 焼成・堅緻	東播系須恵器
44	土師器	坏	底部	SC7	-	(7.1)	-	風化のため不明	風化のため不明	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/2	2mm以下の褐色粒 微細な無色透明光沢粒 黒色光沢粒わずか	約1/3残存
45	縄文土器	深鉢	口縁部	SC7	-	-	-	貼付突帯文 横ナデ、スス付着	横ナデ スス付着	にぶい黄橙 10YR7/4	暗灰 N3/	4mm以下の褐色粒、灰色粒 1.5mm以下の白色粒わずか	
46	縄文土器	浅鉢	胴部	SE1	-	-	-	横、斜方向の ヘラミガキ 黒斑、赤斑あり	横、斜方向 のヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/4	きめ細かい微細な無色透明光沢粒	
47	土師器	坏	口縁部	SH40	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	1mm以下の褐色粒、灰色粒多量 微細な無色透明光沢粒わずか	
48	縄文土器	浅鉢	口縁部	SH72	-	-	-	横方向の粗いナデ	横ナデ 刺突文	橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm以下の褐色粒わずか	

第1表 土器観察表②

遺物 番号	種別	器種	部位	出土 位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
57	須恵器	こね鉢	口縁部 ~胴部	A1	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	灰白 2.5YR7/1	灰白 2.5YR7/1	1mm以下の黒色粒、灰白色粒少量 焼成：堅緻	東播系須恵器
58	須恵器	壺	胴部	A2	-	-	-	格子目タタキ 褐色の付着物あり	当て具痕	灰N5/ 灰オリーブ 5YR5/1	灰N5/1	微細な灰白色粒わずか 5mm大の灰色粒1こ 焼成：堅緻	
59	須恵器	壺	胴部	A2	-	-	-	格子目タタキ 褐色の付着物あり	当て具痕	灰N5/	灰N5/	精良 焼成：堅緻	
60	須恵器	壺	胴部	A1	-	-	-	平行タタキ 自然釉	斜方向の当て具痕	灰5YR4/1	灰5YR6/1	1mm以下の褐色粒わずか 焼成：堅緻	
61	須恵器	壺	胴部	A1	-	-	-	平行タタキ	当て具痕後ナデ	灰5YR4/1	黄灰5YR4/1	微細な白色粒少量 焼成：堅緻	
62	須恵器	壺	胴部	A1	-	-	-	タタキ痕後 横方向のカキメ	当て具痕	灰5YR6/1	灰5YR6/1	2mm以下の黒色半透明粒わずか 2mm以下の白色粒わずか 焼成：堅緻	亀裂あり
63	須恵器	壺	胴部	A1	-	-	-	格子目タタキ	当て具痕	褐灰 10YR6/1	灰黄褐 10YR6/2	1mm以下の黒色粒わずか 焼成：やや不良	
64	須恵器	壺	胴部	Tr2	-	-	-	格子目タタキ	当て具痕(車輪文)	灰N5/	灰N5/	1mm以下の灰白色粒少量 焼成：堅緻	
65	須恵器	提瓶	胴部	B3	-	-	-	工具によるナデ	回転ナデ 灰白色の付着物あり	灰N5/	灰N5/	1mm以下の灰白色粒少量 焼成：堅緻	
66	土師器	皿	口縁部 ~底部	A1	(8.4)	(6.6)	(1.15)	回転ナデ へら切	回転ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	5mm以下の赤褐色粒 2mm以下の灰色粒わずか	約1/19 残存
67	布痕土器	鉢	口縁部 ~胴部	A1	-	-	-	ナデ 風化	粗い布目疳痕	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6	2mm以下の褐色粒、 灰白色粒少量 微細な無色透明光沢粒少量	口唇部 ケズリ後ナデ
68	土師器	壺	口縁部 ~胴部	一括	(15.8)	-	-	横ナデ 風化著しい	横ナデ 風化著しい	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	3mm以下の褐色粒少量 微細な透明光沢粒わずか	スス付着
69	土師器	壺	口縁部	B3	-	-	-	横ナデ	板状工具による横ナデ 風化	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	4mm以下の茶褐色粒 2mm以下の灰色粒わずか	
70	土師器	坏	底部	B3	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	5mm以下の茶褐色粒 1mm以下の白色粒、灰色粒わずか	高台付 約1/3 残存
71	土師器	坏	底部	Tr2	-	(8.6)	-	風化著しく不明	風化著しく不明	橙5YR6/8	橙5YR7/8	1mm以下の乳白色粒わずか 微細な透明光沢粒わずか	スス付着 約1/7 残存
72	土師器	坏	底部	A	-	(6.4)	-	風化著しい へら切	風化著しく不明	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/4	1mm以下の赤褐色わずか	
73	土師器	坏	底部	A1	-	(6.9)	-	回転ナデ へら切	回転ナデ スス付着、一部黒斑	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR6/6	3mm以下の灰色粒少量 微細な赤褐色粒を少量 微細な黒色光沢粒わずか	
74	土師器	壺	胴部	B2	-	-	-	横方向の粗いタタキ スス付着	ナデ	明黄褐 10YR7/4	明黄褐 10YR7/4	3mm以下の赤褐色粒少量 4mm以下の黒色粒わずか	スス付着
75	土師器	壺	底部	A1	-	(5.2)	-	工具縦ナデ 風化著しい		にぶい黄橙 10YR7/4	褐灰 10YR5/1	1mm以下の灰褐色粒多量 微細な透明粒わずか	約1/4 残存
76	土師器	鉢	口縁部 ~胴部	B2	(15.3)	-	-	ナデ 風化あり	ナデ 風化あり	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	3mm以下の褐色粒 2mm以下の灰白色、灰色粒わずか	約1/6 残存
77	土師器	鉢	口縁部 ~胴部	B3	-	-	-	斜方向のハケメ 横ナデ	斜方向のハケメ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	微細な黒色粒少量 1mm以下の赤褐色粒わずか 1mm以下の光る金色粒わずか	口縁 約1/6 残存
78	土師器	高坏	坏底部 ~脚部	A2	-	-	-	横方向のケズリ 黒斑あり	ナデ 黒斑あり	にぶい黄橙 10YR6/4	脚内面 にぶい黄橙 10YR6/4 坏内面 にぶい赤褐色 5YR5/4	微細な無色透明粒多量 2mm以下の灰白色粒 1mm以下の黒色光沢粒少量	
79	土師器	高坏	坏 ~脚部	B3	-	-	-	風化のため不明	ナデ 指頭痕	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	3mm以下の褐色粒多量 1mm以下の灰白色粒、雲母わずか	約1/2 残存
80-1	縄文土器	深鉢	口縁部	B3	-	-	-	横方向の粗いナデ スス付着、黒斑あり	横方向のナデ 黒斑あり	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	4mm以下の褐色粒、灰色粒 1mm以下の白色粒少量 1mm以下の雲母わずか	80-2と同一個体
80-2	縄文土器	深鉢	胴部	B3	-	-	-	横方向の粗いナデ スス付着(多量)	ナデ、黒斑あり	にぶい黄橙 10YR6/3	黒褐 2.5YR3/1	mm以下の褐色粒、灰色粒 1mm以下の白色粒少量 1mm以下の雲母わずか 2mm以下の褐色粒少量 微細な透明光沢粒少量 1mm程の金色光沢粒わずか	80-1と同一個体
81	縄文土器	深鉢	頸部	B3	-	-	-	横ナデ	横ナデ	黄褐 2.5YR5/3	黄褐 2.5YR3/1		
82	縄文土器	深鉢	口縁部 ~胴部	A1	-	-	-	横、斜方向のナデ	横ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4 浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/2	4mm以下の褐色粒多量 4mm以下の灰色粒多量 2mm以下の白色粒少量	砂粒を含む
83	縄文土器	深鉢	口縁部	B3	-	-	-	粗いナデ スス付着	工具横・斜ナデ 黒斑あり	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	3mm以下の褐色粒多量 微細な無色透明粒少量 1mm以下の灰白色粒少量 微細な雲母わずか	
84	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	-	-	-	貼付突帯文、横ナデ 斜方向の工具痕 黒斑	ナデ 黒斑	淡黄 2.5YR8/3	灰黄 2.5YR7/2	4mm以下の褐色粒、灰色粒多量 微細な無色透明光沢粒わずか 0.5mm以下の雲母わずか 2mm以下の灰色粒	
85	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	-	-	-	貼付突帯文 横方向のナデ スス付着、黒斑あり	横方向のナデ 黒斑あり	にぶい黄橙 10YR7/3	内暗灰N3/	1mm以下の灰白色粒少量 1mm以下の雲母わずか 3mm以下の褐色高師小僧1こ	
86	縄文土器	深鉢	口縁部 ~頸部	A2	-	-	-	貼付突帯文 横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰10YR6/1	3mm以下の黒色粒わずか 1mm以下の褐色粒多量	
87	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	-	-	-	貼付突帯文 横ナデ	ナデ	褐灰7.5YR4/1	浅黄橙10YR8/3	5mm以下の褐色粒多量 3mm以下の灰色粒 1mm以下の白色粒少量 2mm以下の灰色粒多量	
88	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	-	-	-	貼付突帯文 ナデ	ナデ	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6	2mm以下の褐色粒多量 2mm以下の褐色光沢粒わずか 1mm以下の白色光沢粒わずか	
89	縄文土器	浅鉢	口縁部	B3	-	-	-	貼付突帯文 横ナデ 横方向のミガキ	横ナデ	にぶい黄 2.5YR6/4 黒褐2.5YR3/1	黒褐2.5YR3/1	4mm以下の褐色粒多量 微細な金色の光沢粒わずか 4mm以下の褐色粒多量	
90	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	-	-	-	貼付突帯文 横ナデ	横ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	2mm以下の白色粒 微細な白色光沢粒わずか	
91	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	-	-	-	工具による横ナデ 孔列文 微隆起線文	工具による横ナデ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	3mm以下の赤褐色粒 3mm以下の灰色粒 微細な透明光沢粒わずか	外面から未貫通 の孔列文
92	縄文土器	深鉢	口縁部	A2	-	-	-	横ナデ 貼付突帯文	粗いナデ	灰白 2.5YR8/2	灰白 2.5YR8/2	5mm以下の灰色粒多量 3mm以下の褐色粒多量 3mm以下の白色粒少量	穿孔あり 付着物あり

第1表 土器観察表③

遺物番号	種別	器種	部位	出土位置	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
93	縄文土器	深鉢	胴部	B3	-	-	-	刺突文 横方向のナデ スス付着	ナデ 黒変、スス付着	淡黄 2.5YR8/3	黄灰 2.5YR4/1	2mm以下の褐色粒、灰色粒 微細な無色透明光沢粒、黒色光沢 粒少量	
94	縄文土器	深鉢	胴部	B3	-	-	-	刺突文(欠損) 横方向の貝殻条痕文 黒変	横方向の貝殻条痕文 後ナデ	黒 10YR2/1	褐灰 10YR5/1	2mm以下の褐色粒 3mm以下の大の白色粒わずか 微細な無色透明光沢粒少量	
95	縄文土器	深鉢	口縁部 ~胴部	A1	-	-	-	粗い横ナデ 斜方向の貝殻条痕	貝殻条痕	灰褐 7.5YR4/1	灰褐 7.5YR5/2	3mm以下の褐色粒 2mm以下の白色粒 2mm以下の白色透明粒少量 微細な無色透明光沢粒少量	
96	縄文土器	深鉢	口縁部	B3	-	-	-	横方向の貝殻条痕文 スス多量に付着	横方向、一部斜方向の貝 殻条痕文	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	3mm以下の褐色粒 1mm以下の黒色光沢粒わずか	
97	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	-	-	-	横ナデ 横、斜方向の貝殻条痕文	横、斜方向の貝殻条痕文	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	微細な光沢粒少量 微細な白色粒少量	
98	縄文土器	深鉢	胴部	A1	-	-	-	縦方向の貝殻条痕文 スス付着	横ナデ 粗い指頭痕多い	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6	4mm以下の赤色粒少量 微細な透明粒少量 2mm以下の白色光沢粒わずか	
99	縄文土器	深鉢	胴部	A1	-	-	-	横、斜の工具痕	横方向の工具痕 後ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	微細な透明粒少量 2mm以下の赤色粒わずか	
100	縄文土器	深鉢	頸部	A1	-	-	-	横方向の貝殻腹線刺突文 ナデ	横ナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6	微細な透明粒少量	
101	縄文土器	深鉢	胴部	B3	-	-	-	斜方向の貝殻条痕文 横ナデ	横ナデ	暗褐 10YR3/3	褐 10YR4/6	微細な透明光沢粒少量 微細な褐色粒わずか	
102	縄文土器	浅鉢	胴部	A	-	-	-	斜方向の刻み目 凹線、横ナデ	横ナデ	明灰黄 2.5YR5/2	にぶい黄 2.5YR6/3	1mm以下の透明な光沢粒少量 2mm以下の乳白色粒わずか 微細な黒色光沢粒わずか	
103	縄文土器	浅鉢	口縁部	A1	-	-	-	粗いナデ	横ナデ、刺突文 斜方向の沈線文	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	微細な光沢粒少量 微細な白色粒少量	
104	縄文土器	深鉢	口縁部	B3	-	-	-	貼付突帯 横ナデ 横、斜方向のミガキ	横方向のミガキ	黒褐 10YR3/2	黒褐 10YR3/2	微細な透明光沢粒少量 微細な褐色粒わずか	
105	縄文土器	浅鉢	口縁 ~胴部	A1	(31.6)	-	-	ミガキ 風化著しい	ミガキ 一部黒斑	灰黄褐 10YR6/2	浅黄褐 10YR6/6 褐灰 10YR6/1	微細な透明光沢粒多量 微細な黒色粒少量 1mm以下の白色粒少量	約 1/16 残存
106	縄文土器	浅鉢	口縁部 ~胴部	B3	-	-	-	沈線、丁寧なナデ	横方向のミガキ	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい黄 2.5YR6/4	微細な透明光沢粒少量	
107	縄文土器	浅鉢	口縁部	A1	-	-	-	ミガキ	横ナデ ミガキ	浅黄橙 10YR8/3 褐灰 10YR4/1	浅黄橙 10YR8/3 褐灰 10YR4/1	微細な透明光沢粒多量 微細な黒色光沢粒多量 1mm以下の白色粒わずか	
108	縄文土器	浅鉢	口縁部	B2	-	-	-	横方向の丁寧なミガキ	横方向の丁寧なミガキ	灰褐 7.5YR4/2	灰褐 7.5YR4/2	微細な透明光沢粒少量 微細な白色粒わずか	
109	縄文土器	浅鉢	頸部 ~胴部	A1	-	-	-	横方向のミガキ ススわずか	横方向のミガキ 横ナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	黒褐 10YR3/2	微細な透明粒少量 微細な白色粒わずか	約 1/11 残存
110	縄文土器	浅鉢	胴部	A1	-	-	-	横方向のミガキ スス残る	横方向の工具ナデ スス残る	にぶい黄褐 10YR5/3 にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい褐 7.5YR6/3	微細な光沢粒少量 微細な赤褐色粒わずか	
111	縄文土器	浅鉢	胴部	B3	-	-	-	横方向のミガキ	横方向のミガキ	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	微細な透明光沢粒	
112	縄文土器	浅鉢	頸部 ~胴部	A1	-	-	-	横、斜方向のミガキ 黒変	横方向のミガキ	にぶい黄 2.5YR6/3	にぶい黄 2.5YR6/3	微細な透明粒わずか 微細な白色粒わずか	
113	縄文土器	深鉢	底部	A1	-	(9.8)	-	横ナデ後指おさえ 粗いナデ	横ナデ後指頭痕	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄褐 10YR5/3	3mm以下の赤褐色粒少量 微細な光沢粒少量	約 2/5 残存
114	縄文土器	深鉢	底部	A2	-	(14.0)	-	風化著しく不明	斜方向のナデ 強い指ナデ、網代底	にぶい黄橙 10YR7/4	暗灰黄 2.5Y5/2	微細な透明光沢粒少量 微細な赤色粒わずか	約 1/4 残存
115	土製品	土器片鏝		A1	最大長 5.75	最大幅 7.25	最大厚 1.3	ナデ 風化	工具横、斜ナデ 炭化物付着、黒斑	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	2mm以下の褐色粒多量 1mm以下の黒色粒、 無色透明粒少量	重量 50.5g

第2表 陶磁器観察表

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
49	古瀬戸	瓶子	胴部	A	-	-	-	画花文 鉄釉	回転ナデ	黄褐色 2.5YR5/4	灰白 2.5YR8/2	精良 焼成：堅緻	袋物 14C
50	白磁	碗	口縁部	B3	(13.0)	-	-	施釉 釉だまり 気泡あり	施釉 釉だまり	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	精良 焼成：堅緻	大宰府分類碗IV類 11C後半～12C前半
51	白磁	碗	口縁部	B3	(11.0)	-	-	施釉 気泡あり	施釉 気泡あり	灰白 2.5YR8/1	灰白 N8/	精良 焼成：堅緻	大宰府分類碗V類 またはVII類 11C後半～12C前半
52	白磁	碗	底部 ~胴部	B3	-	(4.8)	-	施釉 露胎	施釉	灰白 10YR8/1 灰白 N8/	灰白 10YR8/1	精良 焼成：堅緻	大宰府分類碗IV類 11C後半～12C前半
53	白磁	碗	底部	B2	-	(5.9)	-	露胎	施釉 目痕に砂付着	灰白 2.5YR7/1	灰黄 2.5YR7/2	精良 焼成：堅緻	大宰府分類碗IV類 11C後半～12C前半
54	白磁	皿	底部 ~胴部	B3	-	(3.2)	-	施釉 露胎	施釉 円状の削り出し	灰白 5Y8/2 灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/2	精良 焼成：堅緻	大宰府分類皿VI類 11C後半～12C前半
55	白磁	皿	底部 ~胴部	B3	-	(4.2)	-	施釉 露胎	施釉	灰白 7.5Y8/4 灰白 10YR8/1	灰白 7.5YR8/4	精良 焼成：堅緻	大宰府分類皿VI類 11C後半～12C前半
56	青磁	皿	底部 ~胴部	B3	-	(3.6)	-	施釉 露胎	施釉 草花文	オリーブ灰 10YR6/2 灰白 N8/	オリーブ灰 10YR6/2	精良 焼成：堅緻	

第3表 石器計測表

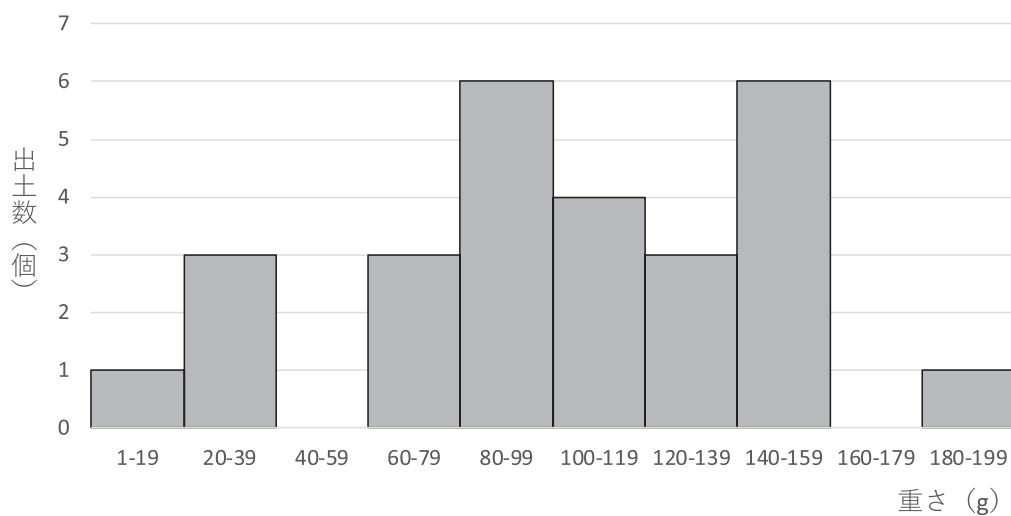
遺物 番号	器種	石材	出土 地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
16	敲石	砂岩	SA1	142	69	42.5	605
18	敲石	砂岩	SC4	183	71	53	955
33	石斧	泥岩源ホルンフェルス	SC5	135	56	16	131.4
34	石斧 (未製品)	泥岩源ホルンフェルス	SC5	106	81	22	148.6
35	石錘	泥岩源ホルンフェルス	SC5	35	62	11	30.5
36	石錘	砂岩	SC5	14.5	55	13	29.9
37	石錘	頁岩	SC1	59.5	74.5	22	145
39	スクレイパー	チャート	SC2	45	66	13	37.5
42	石錘	砂岩源ホルンフェルス	SC6	50	103	23	189.9
116	二次加工剥片	頁岩源ホルンフェルス	A1	141	50	19	93.3
117	二次加工剥片	頁岩源ホルンフェルス	A1	119	64	14	115.1
118	二次加工剥片	頁岩源ホルンフェルス	A1	69	86	19	134
119	二次加工剥片	頁岩	A1	53	58	16	54.6
120	二次加工剥片	砂岩源ホルンフェルス	B3	110	54	22	121.4
121	二次加工剥片	砂岩源ホルンフェルス	B3	65	74	5	31
122	二次加工剥片	砂岩	B2	60	67	15	72.1
123	石斧	砂岩源ホルンフェルス	一括	184	74	38	649.2
124	石斧	砂岩源ホルンフェルス	A1	137	55	30	345
125	石斧	泥岩源ホルンフェルス	A一括	89	44	16	89.2
126	石斧	頁岩源ホルンフェルス	B3一括	83	42	17.5	71.5
127	石斧	頁岩源ホルンフェルス	A1	97	36	12	48.8
128	石斧	砂岩源ホルンフェルス	一括	152	74	12	156.6
129	石斧	頁岩	A2	99	64	16	112.8
130	石斧	頁岩	B2	60	59	13	62.7
131	石斧	頁岩源ホルンフェルス	B3	101	74	17	111.2
132	石斧	砂岩源ホルンフェルス	一括	75	54	17	88
133	石斧	頁岩源ホルンフェルス	B3	108	72	16	110.5
134	石斧	頁岩源ホルンフェルス	B3	104	58	9	78.6
135	石斧	頁岩	B3	83	63	20	105
136	石斧	砂岩源ホルンフェルス	B2	80.5	49.5	100.5	65.4
137	礫器	泥岩源ホルンフェルス	B2	78	102	64	646.5
138	石包丁	泥岩源ホルンフェルス	B3	41	58	9	26.1
139	石錘	砂岩	A2	57	101	19	157.6
140	石錘	砂岩	A2	55	92	19	142.4
141	石錘	砂岩	A1	60	79	21	150.9
142	石錘	泥岩源ホルンフェルス	一括	61	76	23	148.9
143	石錘	泥岩源ホルンフェルス	A1	69	75	15	110.8
144	石錘	泥岩源ホルンフェルス	A1	67	62	21	131
145	石錘	頁岩	A1	47	88	19	98.3
146	石錘	頁岩	A1	54	75	18	89
147	石錘	泥岩源ホルンフェルス	B2	57	61	13	70
148	石錘	頁岩	B3一括	29	37	60	9.2
149	敲石	斑状花崗岩	一括	110	88	40	557.7
150	敲石	砂岩	一括	114	88	48	519.5
151	敲石	砂岩	A1	106	52	34	265
152	磨石	砂岩	A1	118	108	52	968
153	磨石	砂岩	B3	87	77	39	395.3
154	磨石	溶結凝灰岩	B2	47	30	52	90
155	石皿	砂岩	B2	261	386	83	13800
156	砥石	頁岩	一括	261	56	39	803.4

第4表 鉄器計測表

遺物 番号	器種	出土地点	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
11	刀子	SD1	170.5	19	6	28	2箇所接合 刃部110mm、基部60.5mm 基部に木質が残る

第5表 石錘一覧表

遺物 番号	出土位置	石材	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
37	SC1	頁岩	6.0	7.5	2.2	145.0	
35	SC5	砂岩	1.5	5.5	1.3	29.9	
36	SC5	泥岩源ホルンフェルス	3.5	6.2	1.1	30.5	
42	SC6	砂岩源ホルンフェルス	5.0	10.3	2.3	189.9	
145	A1 II	頁岩	4.7	8.8	1.9	98.3	
143	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	6.9	7.5	1.5	110.8	
144	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	6.7	6.2	2.1	131.0	
141	A1 II	砂岩	6.0	7.9	2.1	150.9	
146	A1 II	頁岩	5.4	7.5	1.8	89.0	
139	A2 II	砂岩	5.7	10.1	1.9	157.6	
140	A2 II	砂岩	5.5	9.2	1.9	142.4	
147	B2 II	泥岩源ホルンフェルス	5.7	6.1	1.3	70.0	
148	B3 II	頁岩	2.9	3.7	6.0	9.2	
142	調査区一括	泥岩源ホルンフェルス	6.1	7.6	2.3	148.9	
	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	5.6	6.7	1.9	101.5	
	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	6.1	9.1	1.7	141.5	
	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	5.1	6.8	2.0	93.5	
	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	5.2	6.6	1.7	84.6	
	A1 II	砂岩	5.8	7.5	1.9	119.9	
	A1 II	頁岩	5.1	6.7	1.2	65.0	
	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	5.7	8.7	1.5	92.0	
	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	5.0	5.3	1.6	47.8	欠損
	A1 II	砂岩	4.4	5.6	1.3	39.8	欠損
	A1 II	泥岩源ホルンフェルス	5.6	8.1	1.9	98.8	
	B2 II	砂岩	5.8	7.1	1.8	127.2	
	B3 II	砂岩	4.3	6.5	2.2	75.4	欠損
	SH	砂岩	5.1	7.4	2.0	109.8	
	SH	泥岩源ホルンフェルス	5.0	5.5	1.4	61.7	欠損
	Tr. 5	砂岩	6.1	7.2	2.2	132.8	
	調査区一括	頁岩	5.6	4.4	1.1	35.2	欠損
	調査区一括	頁岩	5.1	6.5	1.8	68.2	欠損
	A1 II	頁岩	6.5	7.3	0.7	66.8	
	B2 II	頁岩	5.4	4.1	1.0	37.3	



第34図 石錘度数分布表

第IV章 自然科学分析

(株) 古環境研究センター

第1節 自然科学分析の概要

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村, 2003)。

第2節 放射性炭素年代測定

1 試料と方法

試料は、No.1～No.5の5点である。このうち、No.4とNo.5は黒色磨研土器であり、土器の表面を薄く削り取って測定試料とした。前処理として酸-アルカリ-酸処理(AAA処理)を行い、測定は加速器質量分析法(AMS法)で行った。測定試料の詳細と前処理及び測定法を第6表に表す。

2 測定結果

AMS法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(^{14}C)年代および暦年代(校正年代)を算出した。第7表にこれらの結果を示し、第35図に各試料の暦年校正結果(校正曲線)、第36図に暦年校正年代マルチプロット図を示す。

(1) δ (デルタ) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素(^{14}C)年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD 1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差(±)は1 σ (シグマ) σ (68.2%確率)である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年校正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年校正用年代値を併記した。

(3) 暦年代(Calendar Years)

放射性炭素(^{14}C)年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動や ^{14}C の半減期の違いを校正している。暦年代校正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値および福井県水月湖の年縞堆積物データなどにより作成された校正曲線を使用した。校正曲線のデータはIntCal 20、校正プログラムはOxCal 4.3である。

暦年代(校正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により2 σ (シグマ) σ (95.4%確率)で示した。校正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

3 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 では 1300 ± 20 年 BP (2σ の暦年代で AD 662 ~ 775 年)、No.2 では 1140 ± 20 年 BP (AD 773 ~ 786, 830 ~ 853, 874 ~ 987 年)、No.3 では 1160 ± 20 年 BP (AD 772 ~ 790, 822 ~ 904, 914 ~ 975 年)、No.4 では 2180 ± 20 年 BP (BC 359 ~ 276, 261 ~ 244, 235 ~ 161 年)、No.5 では 2540 ± 20 年 BP (BC 795 ~ 747, 689 ~ 665, 644 ~ 562 年) の年代値が得られた。

No.4 と No.5 は黒色磨研土器であり、土器の表面を薄く削り取って測定試料とした。このため、土器胎土に含まれる古い炭素が年代値に影響している可能性も否定できない。

第6表 測定試料の詳細と方法

試料番号	掲載番号	遺構	種類	前処理	測定法
No.1	12	SA 1 内土器付着 - 外面	炭化物	(AAA 処理) 酸 - アルカリ - 酸処理	AMS 法
No.2	1	A 区 SD 1 内土器No.1 a- 外面	炭化材	(AAA 処理) 酸 - アルカリ - 酸処理	AMS 法
No.3		A 区 SD 1 内土器No.1 b- 外面	炭化材	(AAA 処理) 酸 - アルカリ - 酸処理	AMS 法
No.4	4	A 区 SD 1 内土器No.5 - 内面	炭化材	(AAA 処理) 酸 - アルカリ - 酸処理	AMS 法
No.5	2	A 区 SD 1 内土器No.8 - 内面	炭化材	(AAA 処理) 酸 - アルカリ - 酸処理	AMS 法

第7表 放射性炭素年代測定結果

試料番号	測定No. IAAA-	δ ¹³ C (‰)	¹⁴ C 年代 (年 BP)	暦年較正用年代 (年 BP)	暦年代 (較正年代)	
					1 σ (68.2% 確率)	2 σ (95.4% 確率)
No.1	201709	-25.92 ± 0.17	1300 ± 20	1298 ± 22	cal AD 671-702 (31.3%) cal AD 741-772 (37.0%)	cal AD 662-775 (95.4%)
No.2	201710	-19.48 ± 0.16	1140 ± 20	1143 ± 22	cal AD 883-900 (16.4%) cal AD 917-973 (51.9%)	cal AD 773-786 (4.7%) cal AD 830-853 (5.3%) cal AD 874-987 (85.4%)
No.3	201711	-19.82 ± 0.17	1160 ± 20	1160 ± 22	cal AD 776-786 (9.4%) cal AD 832-851 (13.8%) cal AD 875-896 (22.1%) cal AD 924-950 (23.0%)	cal AD 772-790 (11.9%) cal AD 822-904 (50.7%) cal AD 914-975 (32.9%)
No.4	201712	-19.94 ± 0.20	2180 ± 20	2179 ± 22	cal BC 351-296 (42.4%) cal BC 209-174 (25.9%)	cal BC 359-276 (53.8%) cal BC 261-244 (2.8%) cal BC 235-161 (38.9%)
No.5	201713	-23.35 ± 0.20	2540 ± 20	2542 ± 23	cal BC 790-753 (43.3%) cal BC 682-669 (11.7%) cal BC 610-593 (13.3%)	cal BC 795-747 (46.2%) cal BC 689-665 (14.6%) cal BC 644-562 (34.6%)

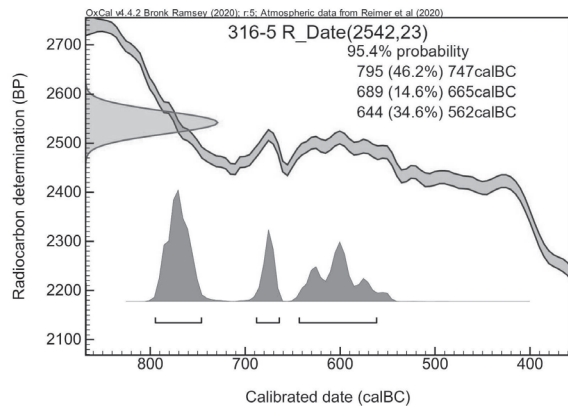
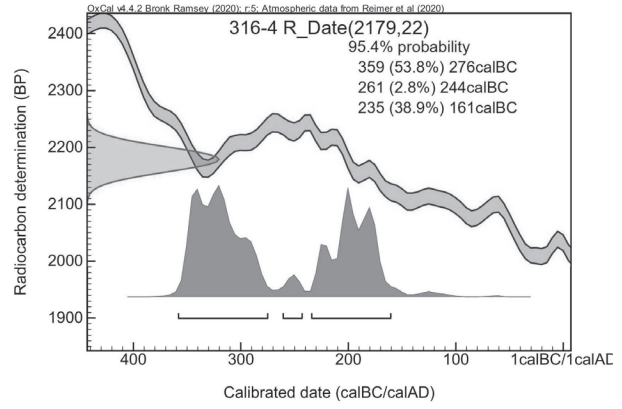
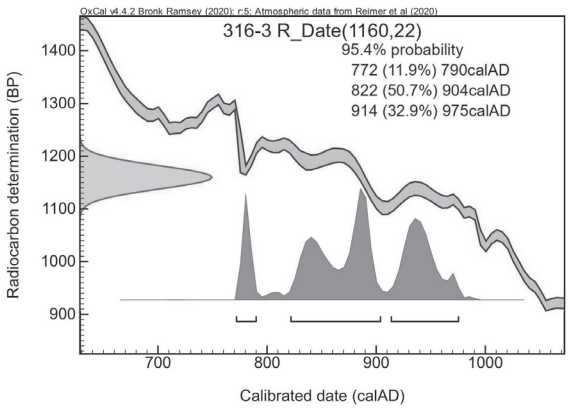
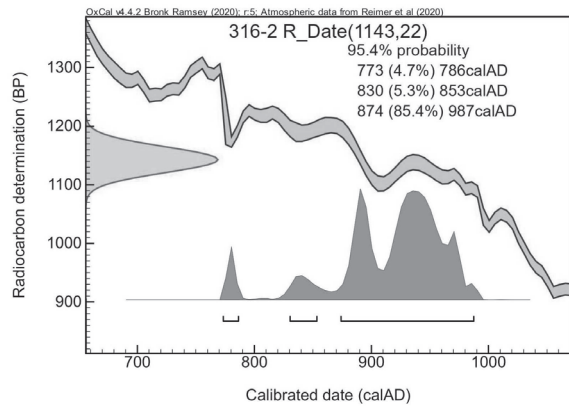
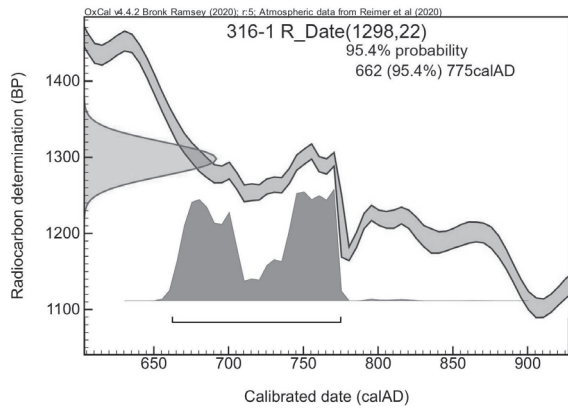
文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」. 日本第四紀学会, p. 3-20.

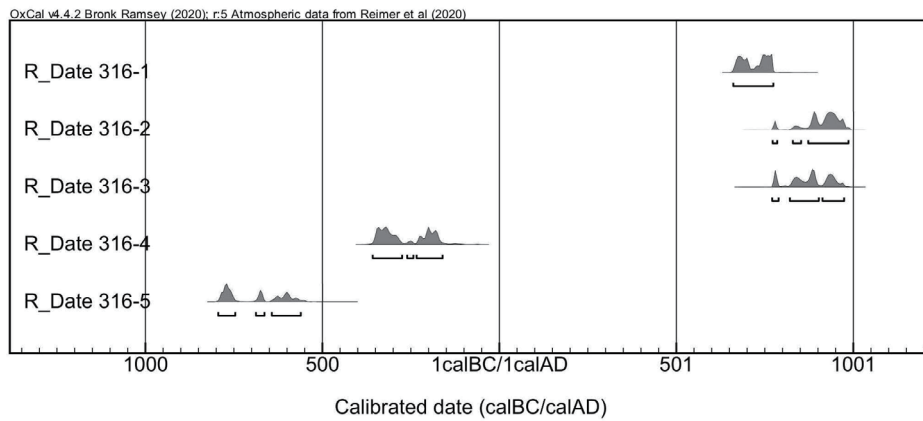
中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p. 301-322.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p. 1-33,



第 35 図 暦年較正結果



第 36 図 暦年較正年代マルチプロット図

第V章 総括

串木遺跡第3地点は、一ツ瀬川中流左岸段丘上に立地する。西都市による以前の調査(串木第1・第2遺跡)では、集石遺構や住居跡が確認され、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡として認識されていた。今回の発掘調査では、鬼界アカホヤ火山灰層より上位での遺構・遺物の検出を行い、縄文時代後期以降の調査が中心となった。歩道整備工事に伴う限られた面積の調査であったが、出土した遺構・遺物は、地域の歴史を考えるうえで重要な情報を内包した貴重な資料である。今回の発掘調査の成果について簡略ではあるがまとめを述べる。

第1節 遺構について

本遺跡では、縄文時代から古代までの遺構が検出された。1号土壙墓からは土師器壺1点、坏9点、刀子1点が出土している。壺は推定口径9.4cmの小型の広口壺で、坏は器高の低いヘラ切りのものが多数である。両黒で内外面に黒化調整を施す黒色土器を1点含む。土器の型式から、平安時代(10世紀前半)の遺物と考えられる。刀子は全長17.05cmで、いずれも遺構内の西側にまとまって出土しており、人骨は検出されなかったものの、被葬者の傍らに供された副葬品と考えられる。1号竪穴建物は、出土遺物から古墳時代後期(6世紀後半)に属すると考えられる。平面形が方形を基調としており、明確な貼床や柱穴は確認できない。多数検出された小穴群については、平面分布を検討したが掘立柱建物や柵を認定することは困難であった。土坑は7基検出しているが、明確な時期が特定できるのは5号土坑のみであった。鱗状突起を有する口縁部から胴部の内外面にミガキを施す磨研土器、切目石錘が出土しており、縄文時代後期から晩期の遺構であると考えられる。その他、1号溝状遺構、1号配石遺構などの遺構では、詳細な時期を判断することが困難であった。

第2節 出土遺物について

土器類は、口縁部が少なく限定的ではあるが、縄文時代から中世にかけての土器、須恵器、陶磁器が出土した。遺物包含層であるII層直上が現耕作土であることから攪乱の影響を受けていることが考えられる。出土遺物の5割が縄文時代後期から晩期の縄文土器である。文様や調整の特徴からI類からVIII類に分類したが、VI類のうち黒色磨研土器でリボン状突起を有する土器は、その特徴から黒川式土器に属する。一部に見られる施文や頸部の器形から縄文時代後期から晩期の遺物であると考えられる。古墳時代の土師器は、風化が著しく砂粒を含むものが多い。古代の土師器は、表面が滑らかで橙系の色調が特徴的である。須恵器は東播系須恵器2点を含む10点が出土しており、いずれも外面に平行タタキ、格子目タタキが施されている。提瓶の胴部は器形から古墳時代のものであると考えられる。輸入磁器は16点出土した。白磁は大宰府分類碗IV類、V類、皿VI類に属し、11世紀後半から12世紀前半のものであると考えられる。

石器は、出土数が多い順に、剥片67点、石錘33点、石斧17点と続く。まとまった量で出土した石錘から、近隣の一ツ瀬川で漁労活動を営んでいたことが推定できる。石材別に見ると、打製石斧やスクレイパーなど刃部を呈する石器は、砂岩や泥岩を起源とするホルンフェルス(燧石)を石材とするものが多く、熱変成したより硬質な石材を使用している。また、石錘は砂岩や頁岩、泥岩源ホルンフェルスなど多様な石材を使用しており、硬度より重量が重要であったと推定される。石錘の重さを一覧表に、完形の石錘を重量別に度数分布表に整理した(第5表・第34図)。60~159gの範囲に集中しており、比較的軽量なものが多い。

第3節 自然科学分析について

自然科学分析では、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を試料5点で行った。

1号土壇墓出土の土師器は、遺物の型式から古代の遺物であると考えられる。壺1は、外面全体に密着した炭化物2箇所（試料2・3）を試料とし、1140±20年BP（AD874～987）、1160±20年BP（AD822～904）の年代値が得られた。外面にこびりつくように付着した炭化物であることから、この壺が使用された時期を示す値であると考えられる。同遺構から出土した坏2点では、土器表面に付着した微量の炭化物を薄く削り取って資料とした。黒色土器の坏2（試料5）では2540±20年BP（BC795～747）、にぶい橙色の坏4（試料4）は2180±20年BP（BC359～276）の年代値が得られた。炭化物の量が少なく、土器自体を削り取った試料のため、土器胎土に含まれた古い炭素が測定に影響したものと思われる。

1号竪穴建物で出土した土師器壺12については、外面に付着した炭化物を試料とし（試料1）、1300±20年BP（AD662～775）の年代値が得られた。土器の特徴から古墳時代後期（6世紀後半）のもものと推定されるが、上記の結果から、炭化物は土器が使用された時期に付着したものではなく、埋没後に付着したものである可能性が高い。

第4節 まとめ

今回の発掘調査は、一ツ瀬川中流左岸段丘上に位置する調査地を対象とし、縄文時代後晩期から古墳時代、古代の遺構・遺物が確認され、長期間にわたる断続的な土地利用のあり方が読みとれた。特に、古代の土壇墓からまとまって出土した土師器や刀子は貴重な成果と言える。今回の調査により、西都市穂北地区における縄文時代後期から古代にかけての人々の営みの一端を把握することができた。今回の成果が、今後の調査・研究の一助になることを期待したい。

【引用・参考文献】

- 西都市史編さん委員会 2016 『西都市史』
小林達雄 2008 『総覧 縄文土器』 総覧 縄文土器 刊行委員会
中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
日本貿易陶磁研究会 1998 『貿易陶磁研究 No.1-NO.5』 六一書房
西都市教育委員会 1986 『西都市遺跡詳細分布調査報告書』
西都市教育委員会 1991 『串木第1遺跡 串木第2遺跡 岳惣寺遺跡』 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
西都市教育委員会 1996 『西都原地区遺跡』 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



S D 1 遺物検出状況



S A 1 遺物検出状況

図版 3



SC 3 完掘状況



SC 4 完掘状況



SC 5 完掘状況



SC 2 完掘状況



SI 1 検出状況

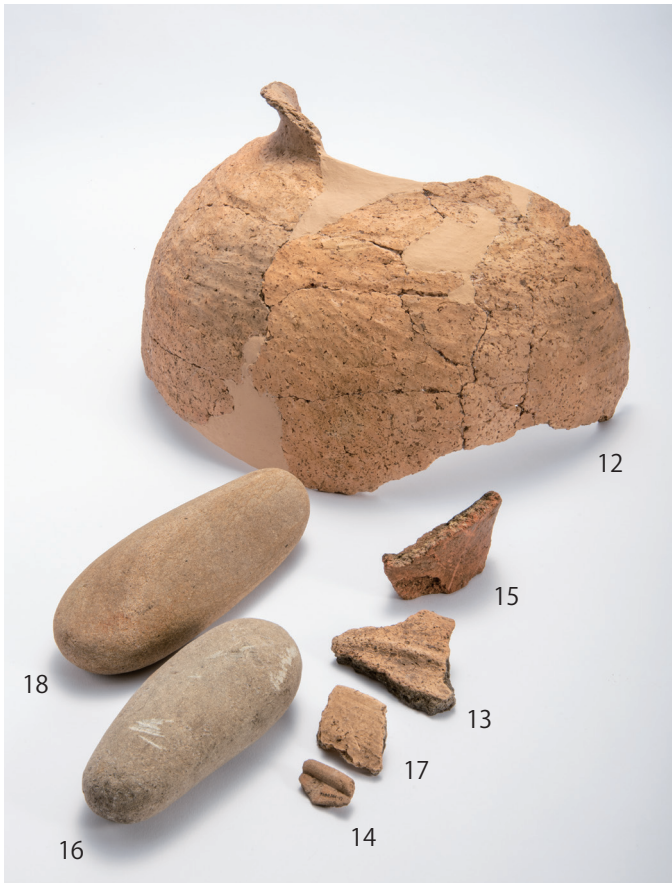


SE 1 完掘状況

図版4



SD1 出土遺物



古墳時代の遺構に伴う遺物

12~16: SA1 17: SC3 18: SC4



SC5 出土遺物 石器



SC 5 出土遺物 土器



時期不明の遺構に伴う遺物

37: SC 1 38・39: SC 2 40~42: SC 6 43~45: SC 7 46: SE 1 47・48: 小穴群

図版6 包含層出土遺物（1）



国産陶器・輸入磁器類



須恵器



中世土師器・布痕土器・古代土師器



古墳時代の土師器

図版7 包含層出土遺物（2） 縄文土器



突帯文系



無文系



貝殻文系



磨研土器系



擬縄文系・沈線文系



底部・土製品

图版8 包含層出土遺物（3） 石器



打製石斧



二次加工剥片



石錘



礮器・石包丁



石皿・砥石



敲石・磨石

報告書抄録

ふりがな	くしきいせき だい3ちてん							
書名	串木遺跡 第3地点							
副書名	県道杉安高鍋線山城工区歩道整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第260集							
編著者名	大竹 進太郎							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦2022年 2月 28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くしきいせき 串木遺跡 だい ちてん 第3地点	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあざほきた 大字穂北 763-1ほか	45208	2021	32° 08' 44" 付近	131° 23' 07" 付近	2020.9.25 ～ 2020.12.15	約210㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
串木遺跡 第3地点	散布地	古代	土壙墓	1基	土師器、鉄器			
		古墳時代	竪穴建物	1基	土師器、石器			
			土坑	2基	土師器、石器			
		縄文時代後期 ～晩期	土坑	1基	縄文土器、石器			
時期不明	土坑	4基	縄文土器、土師器					
			溝状遺構	1条	須恵器、石器			
			配石遺構	1基				
			小穴群	94基				
要約	串木遺跡第3地点は、一ツ瀬川中流左岸段丘上に位置している。調査の結果、古代の土壙墓1基、古墳時代の竪穴建物1基、土坑2基、縄文時代後期から晩期の土坑1基、時期不明の土坑4基、溝状遺構1条、配石遺構1基、小穴群94基が確認され、長期間にわたる断続的な土地利用のあり方が読みとれた。今回の調査により、西都市穂北地区における縄文時代後期から古代にかけての人々の営みの一端を把握することができた。							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 260 集

串木遺跡 第 3 地点

県道杉安高鍋線山城工区歩道整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年2月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 有限会社富士写真印刷

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 7418-2

TEL 0985(74)2179 FAX 0985(74)3066

Saito City

Kushiki Site

3rd point

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center

vol.260

2022

Miyazaki Prefectural Archaeological Center